

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第152号（2019年1月）

風に吹かれて（129）

白井啓治

・元日の穏やかに明けて穏やかに夕暮れて

古希を迎えた頃からだったと思うが、自分の人生を年齢で考えるのを止めようと思い、日の移ろいで数えることにした。その方が自分の人生を日々大事に過ごせるようになるのではないかと考えたわけであるが、日々を無駄なく大事に過ごせているかと言うと、そうとは言い切れない。ただ自分の人生を毎日一日の足し算で数えることで無為が無為でなくなってきたように思う。生かされているのではなく生きていると思えてきた。無為に思える一日でも無為が無為ではなくなってくる。吾がことながら、人間と云う奴は実に不思議で面白い奴だと改めて思う。

暮れの二十八日にぐらついてもうどうにも処置の使用のなくなった左下の奥歯を抜いた。暫く痛みが続いていたのだが、だましだまししているうちに痛みが伝染し鼻炎を起こし、抜くことにしたのだった。しかし、少しばかり放置し過ぎた所為で歯茎と鼻腔の間に炎症を起こし、年明けに口腔外科に行ったら炎症部分の除去手術しなければならなかった。

何とも締まらない話であるが放置しておいた付けが回ってきたが、諦めるしかない。暮れから三が日の間、鎮痛剤で抑えていたのだが、定期的に襲ってくる痛みにはとほと疲れ果ててしまった。

襲ってくる痛みの中で気づいたのだが、鎮痛剤が切れて痛みが来始めると、必ず白か黒のお猫がやって来て患部に当たる鼻のわきを舐めてくれるのである。ニャンSには痛みがやって来ることが解るようだ。ニャンSがひとしきり舐めてくれた直ぐ後に激痛がやって来るのである。それに気付いて、ニャンSが顔を舐めに来たら我慢せず直ぐに鎮痛剤を飲むことにした。動物たちはアドレナリンを良く嗅ぐといわれているが、まさにニャンSはご主人様に異変が来ると察知して見まいに来るようである。

鎮痛剤の効いてくるのを待ちながら思った。動物たちは、鋭い嗅覚で常に危険回避行動をとっているのだらうな、と。

この数年というものの、天変地異が異常に多くなってきたように思うが、天変地異と人間行動の異常さがどうも連動しているように思えるのだが、はたして無関係とは言えないように思う。我が国だけにとどまらず世界の各国でリーダー達のリーダーらしからぬ言動が目にするようである。戦争という殺戮は、愚かなリーダーが登場するた

びに引き起こされるとは聞いたことがあるが、そんな不安が大きく広がる。

ワンニャン3Sと暮らしていると、彼らは決して諍いを起こさない。諍いが起こる前に必ず回避行動をとる。回避行動がとれないのは、愚かな人間のリーダーだけのように思えてくる。そして愚かな行動は天変地異に連動してあると言えるのではないだろうか。個人的には、人生を年で考えることを止めたのではあるが、社会的にはこの一年に人災の起こらないことを願うばかりだ。

さて当風の会も、今年は十四年目に入ることになる。先日、発刊初期の会報を眺めていたが、当会の内容も随分と進歩してきたな、としみじみ自画自賛した。発刊一年目の内容と比べると、ものの方が随分と大人になってきたものだ、と感心してしまった。

会員はそれぞれ思うものは違うが、その表現が矢張り継続のお陰なのだろう確りと語れるようになってきたと思う。

打田兄の私本平家物語はあと半年ほどで終わりとなるが、巻一、巻二と比較すると今ではすっかり自分のものとして書かれている。菅原兄は、自分の領分を確りと定め緻密な検証をもって書かれている。木村兄は、ふるさとルネサンス塾で目指したふるさとの歴史・文化を再発見ルネサンスしようという志向をそのままに書いておられる。木下兄の労音史などは小生には懐かしい思い出である。石岡の歴史を伝えようと必死の兼平姉、おらが村に正直に声する伊藤姉。聾という障害にめげず己の興味を言葉にぶつける小林幸枝。この一年も全員元気に、己を表現して行って貰うことを願うばかりである。

遺伝子対立の怪

菅原茂美

「遺伝子の対立」については、あまり耳にしないう話だが、身近かで、非常に意味深な話なので、少々触れてみたい。

また、「生存競争」とは、所詮、生後の事だと思っただら、受精卵の時から、同じ遺伝子座を占める対立遺伝子同士（例：背丈の高低など）で、既に始まっているのだという。例えば夫婦間で背丈が違う場合、その子供の背丈を決める遺伝子は、低い方の遺伝子が、高くする方の遺伝子の活動を押さえつけ、優勢なのだという。という事は、子供の背の高さの遺伝については、低くする方の遺伝子は、高くする方の遺伝子との生存競争に勝っているという事。

それゆえ、それぞれの遺伝子は、自分の仲間を増やして、自分と同じ目的を持つ遺伝子を、増殖させようとする。更に生後、新生児から成人への生き方を操って、次の世代でも、自分と同じ遺伝子が活躍できるように、生体をプログラム化しようとしているのだという（イギリスの動物行動学者・リチャード・ドーキンス博士）。

つまり、利己的な人が生き残れるというのではなく、新個体において、対立する遺伝子に対し、利己的に振舞う遺伝子が生き残るという事。従って個人（親）の任務とは、この世に生きるというより、単なる遺伝子の「運び屋」なのだという。哲学ではなく、純然たる生化学なのだ。

個体とは遺伝子により作られた集合体であり、遺伝子の塊が、バラバラにならないよう、1つの細胞の核の中に閉じ込め（真核生物、それを次々親から子に引き渡す（受精）のが世代交代）。

そして遺伝子は、受精卵の時代からライバルを

抑え、自分の仲間の遺伝子のみが生き残れるよう、生体を操っているのだという。という事は、親という個人の配偶子（精子又は卵子）が相手と結びつき（受精）、健全に成長して、次世代の受精卵に遺伝子が引き繋がれば、個体の生命の役割は終わり。即ち「孫」を見れば、個体のこの世に生きた使命は、終了という事になる。

*

飛躍と言われるかもしれないが、生き物全てが何故こんなに「縄張り争い」に明け暮れ、人類は知性が発達したにもかかわらず、一向に争いが絶えず、野生本能丸出し。更に戦争まで起こす愚かさから脱却できないのか。受精卵の時代から、遺伝子は生存競争する実態があるのなら、これ（闘い好きも、やむを得ない生き物の本性なのかもしれない）と最近、変に納得。

物事は表面のみで鵜呑みにせず、囲碁じゃないが、奥の奥を読み切らなければ真意がわからない。達人は、表面は穏やかな手でも、奥には「爪」を隠しているのか。と最近、切に感じる。

親の任務は、自分の生殖細胞が成熟し、受精卵へと発展し、妊娠・分娩を無事済まし、子供が無事成長し青年期になり、再び生殖細胞が受精卵へと命を繋げば、一個体の役割は終了。つまり、人は卵巣・精巣の中でもう一人の人間を育てているという事。親から受け継いだ遺伝子を、精巣や卵巣で後生大事に保持（*1）し、次の世代に遺伝子を送り込む「運び屋」稼業に徹する。それが人生であるという。これが生き物の本来の姿。生存競争に勝つという事は、まずもって受精卵の時代に対立するライバル遺伝子に勝つという事。即ち、対立する遺伝子の活動を抑え込むという事。これじや個人の努力も、鍛錬もあつたもんじやない。人

の一生とは、単なる遺伝子の運び屋＝運送屋とはねえ。

（*1）「生殖細胞の保持」…動物の雄は、爬虫類時代まで、命の根源・精巣を後生大事に、卵巣と同じ、膀胱のあたりの大事な所に格納していた。それが鳥類を除いて哺乳類の精巣は、温血動物に進化すると、いくら精子は体温より低い方が、活動的：とは言え、体表の、しかも藪の中など歩けば、草や木に触れて傷つきやすい股間などに定着したのか。というも疑問に思っていた。

危険を避けるためには、精巣は別に丸くなければならぬという理屈はないので、後頭部の頭蓋骨の内側あたりに、厚さ5mm、縦横3cmぐらいの板チョコみたいな平板状の精巣が理想。おしっこは現状で良い。精子は、遺伝子という分子単位で静脈血流に放出。膀胱あたりにその分子を回収する機関が発達し、精子という本来の姿にリホームし、射精。受精へと進む。

なお私は結婚する時（57年前、もし私自身に不妊要因があつたら相手に迷惑をかける。最近、夫婦で不妊要因検査を受けると、その半分は男性にあると云われる。私自身は獣医師であり、日頃、家畜改良増殖法が認定する牛・馬等種雄畜の精液検査は慣れたもの。そこで私自身の精液を精密検査し合格を確認したので結婚を決意）。

昭和30年6月7日。後楽園球場で巨人中日戦。中日杉下投手のうなるようなシュートが、打者藤尾を直撃。藤尾はもんどりうつてうずくまる。NHKラジオ中継で志村アナは『どこに当たったんでしょうか？』と隣の小西得郎解説者を足でこずく。すると『なんと申しましょうか、ご婦人には絶対わからない痛さでしょうネ』ときたもんだ。これ以来小西は人気沸騰。解説稼業は、大繁盛と

か…。間接法の言い回し解説の巧みさ。

さて鳥類は哺乳類より体温が3℃も高い。それでも、精巣は臍臓あたりの高温の場所に格納されている。理由は多分、空を飛ぶので、冷え過ぎるのを防ぐためであろう。もしかしたら、爬虫類から鳥類に進化する時、神様は精巣を、体表に移すのを忘れしたのかもしれない。

私に言わせれば、体表の精巣はケンカなどすれば一発でやられる。股間など危険な場所に宝物をぶら下げたのは神様の失敗作。尤も雄は消耗品。代替えはいくらでもいる…と解釈すれば、卵巣の貴重さに比べ、精巣など、どこにあつてもよかつぱ…と物臭の神様は、投げやりの心で「雄」を造り遊ばしたか？

*

さて、対立遺伝子の生存競争であるが、親のどちらかが一重瞼(ひとえまぶた)で、片方が二重瞼なら、子供は二重になる確率が高い…即ち、二重が優勢で、一重が劣性という事である。肌と眼と髪の色は、より濃い方が優勢に遺伝する。更に優勢なものを上げると、くせ毛。長いまつげ。低い背丈。悪い歯並び。えくぼはある方。小さな耳たぶより、福耳の方が優勢など…。

このように瞼が一重か二重かを決める遺伝子は、両親の同じ染色体の同じ「遺伝子座」に鎮座している。受精に際し、両親の配偶子(卵子・精子)の核の中の染色体は、両者合体し、シャッフルされ再び半分に分かれる。受精卵は2個↓4個↓8個↓…の細胞に分裂し、人間の大人の体細胞数は60兆個である。母が二重で父が一重だったら、母から来た二重の遺伝子が父から来た一重の遺伝子の働きを押さえつけ、優性に働く。これは、各対立遺伝子(例えば色黒と白い肌)毎に決まっている。但し、

対立項目の種類によつては、遺伝の強さは中間だったり、影響が非常に少ない場合もある。「利き腕」

のように遺伝と全く関係ない場合もある。同じ親から生まれても兄は横綱で、弟は十両の例とか…。それは受精の時、多様性を確保するため、両親の遺伝子をシャッフルするからであり、全くの偶然がなせる業。遺伝性の強弱についてその一覧表を次に掲げる。

1…非常に遺伝性の強いグループ

黒っぽい肌。黒っぽい眼。黒い髪の毛。縮毛。

体臭。集中力。巨乳。

2…遺伝性が中くらいのグループ

数学力。足の長さ。跳躍力。目の大きさ。

鼻の高さ。顔の輪郭。方向音痴。味覚。性欲。

寿命。文才。太りすぎ。

3…遺伝性の弱いグループ

IQ(知能指数)。暗記力。カナヅチ。あがり症。

酒好き。声質。頑固さ。神経質。浮気性。

IQに関して、ノーベル賞受賞者数は今日まで世界でほぼ900人だが、親子で受賞した例は7件のみ。1%にも満たない。もし、IQの遺伝性が強力なら、もっともつと親子受賞の例数が多い筈。この例からも、IQに関しては遺伝性が弱い事がよく分かる。要するに個人の能力や業績は、自己努力以外の何物でもない。

このような事例から、子供の能力の将来性について、問われれば、私は次のように答える。即ち、その子の両親、更にまたその両親…と5代遡ると、32人になる。その32人の社会的評価を10点法で採点し、全部足して32で割る。それが、その子の将来を凡そ見通す基準となるであろう。子供は親ではなく、祖父母に似る事もよくあるので、この考え方は妥当であろう。

*

さて進化の方向性は、生存に有利だから生き残ると限つたものではない。対立遺伝子の内、悪い歯並び、低い背丈、黒っぽい肌色、縮毛、体臭などは、各対立遺伝子より優勢である。考えてみるとこれらは、いずれも劣性の方が生涯に有利であろう。子供の結婚の事を考えたら、これらの優性の遺伝子は、生存競争に負けて、引つ込んでいた方が、将来、有利ではないのか…と親は思うに違いない。

しかし進化の方向性は、雌の好みが進化力ともいわれる。クジャクは敵に襲われたりする時、あんな長い尾羽は敏捷さに欠ける。生存競争は確実に不利。しかし雌の好みにより、何万年もかけて、今日のような長い尾羽となった。

クジャク・オシドリ・キジ等の雄は「婚姻色」と言い、婚期に達するとむやみやたらに体色が綺麗になる。それが生存に有利か不利かに関係なく、ただただ自分の子供も大人になったら、雌にもてる立派な雄になって自分の遺伝子を残してほしいという執念から、より綺麗な雄は選ばれたに相違ない。一般に鳥類の雄の綺麗な羽色は、雌が浮気性だから進化したものと言われる。鳥類は強固な番い(つがい)が多いが、長距離を渡る種類など、多様性が強く求められる。夫の子供だけだったら長旅で全部死ぬ事だつて有り得る。子供の何割かは失つても、たとえ夫の子ではなくとも、子供の何割かは生き残つてくれれば、それでよし…とする習慣があるようだ。

その為、雄は身を飾っておけば、近隣の奥さんに自分の子を産んでもらえるという望みがある為、何万年もかけて綺麗になるように進化した。それゆえ、人類も重要な多様性を維持するため、浮気・

乱婚は許されてよきそう。そう断言すれば、非難の矢が飛んでくるだろう。日本では明治維新で、重婚禁止。しかし、16億人いるイスラム教では、夫一人に妻4人まではOK。

事実、軒下の燕の親子のDNA検査の結果、子供6羽の内、2羽は自分の亭主の子であったが、他の4羽の父親はそれぞれ異なり、子供6羽には5羽の父親がいたという。この際、浮気相手の雄は、実績のある老練な実力者。若い燕は見向きもされない。燕の母は計算高い。

なお関連して言うておくが、進化とは、生存に有利な面が長年にわたり選ばれたから…と勘違いしてはいけない。生物の進化は、遺伝子の突然変異により起こるもので、全くの偶然である。雌に好まれれば、必ずしもイケメンでなくとも、子孫を残す幸運をつかむ事もある。

又、大きな群れが、一斉に突然変異を起こす事もある。蚊などにより、ウイルスは動物の遺伝子を持ち去り、他の個体にその遺伝子を撒き散らすからである。例えば、何らかの植物の毒素を無毒にする遺伝子を持った動物がおり、蚊がその血を吸い、人を吸血した際、人のゲノム（DNAの総体）に、解毒遺伝子が住み着きこれが突然変異、ヒトが食用にできない有毒植物を、食用にできるなどの現象が起きる事もある。云わば自然が人類を品種改良した事になる。

綺麗な花には毒がある…ともいわれ、ある日の新聞俳壇には、【バラに似て 妻は色褪せ トゲ残る】とあった。ま、それはいいとして、日本の3大有毒植物（トリカブト・ドクウツギ・ドクゼリ）のトリカブトには強毒なアルカロイド（毒成分アコニチン）があり、毒キノコ・フグ毒などよりはるかに強い。歴史上の毒殺などの主役。山菜のヨモギ・二輪草と

間違えられ、毎年死亡者が出る。

女性の「ブス」の語源は、弱毒性のトリカブトを間違えて食べ、強くゆがんだ顔を「附子（ブシ）」と呼び、それが、変化したものとされる。

なお序でに、体温上昇障害は多数あるが、『頭を冷やして出直して来い！』という言葉は、生理学的には正当。普通カッカしている時には、脳温は、体温より2℃ぐらい高く、神経の連携が混乱し、正しい判断ができてにくい。『脳温を下げてから出直せ』と言っているのと同じである。

＊

さて本題に入り、「対立遺伝子」とは、父母両方から来た染色体の、同じ遺伝子座に位置する、ある「性質（例…肌色の濃淡）」が、全く反対の表現をする遺伝子同士である。親の希望からすれば、良い方の遺伝子が強く働き、悪い方の遺伝子は、遠慮していてもらいたい…。しかし遺伝の世界では、そんな事は全く関係ない。どちらかが強く、弱い方を押さえつける。要するに遺伝子とは自己複製的に強く働く利己主義なのだ。

以前にも書いたが、メンデルの「分離の法則」というのがある。対立遺伝子が2項目の場合、子供は1…2…1に分離する。例えば父は素晴らしい頭脳の持ち主だが、顔は醜い。一方、母は超美人であるが頭が弱い。ならば、この組み合わせからは、さぞや美人で頭の良い子供が生まれるに違いない…と期待しても、その確率は4分の1。最後の4分の1は、醜い顔で頭も超弱い。要するに、4分の3は期待外れという事。

IQに関しては、親から譲り受けた知能指数は、あまり遺伝性に関係なさそう。俺の頭が弱いのは両親の頭が悪いからだ…は当たらない。

私に言わせれば、小学校での成績はどうでもいい。何かに強い関心をもってゴンボ掘りをし、トコトン納得するまで、追及する習慣が大事…。それなのに一律に個性を無視し、ただ読み書きが良ければ優秀。それが芳しくなければ、できの悪いクズみたいな物言いは厳禁だ。そんな子に限り大器晩成で、どんな大物になるかも…。

また、よく見られる現象は、卒後30年目の同級会で、あんな成績の悪かったあいつが、なんと立派な会社の社長になっていた…などの話もよく聞く。片やあれほど優秀と言われたあいつが、せいぜい役場の書記止まり。

今に見ているオレだって…の意気込みは大切。しかし、菜っ葉のこやし（懸け肥え＝掛け声）に終わっては、空元気！と罵られるのが関の山。

＊

日頃、遺伝子の事などあまり気にしないで生活しているが、悉く遺伝子に支配されているとは、少々想定外。そして遺伝力の強弱など、勘違いも多かった。正しい知識の基に、永続してきた目に見えない支配者「遺伝子」を、もう一度見直すのも、人生の幅を広げるかもしれない。

人類は、智慧があり、万物の霊長と言われるのなら、遺伝子同士の競争という原理に反するかもしれないが、もう少し争いの少ない、互いに助け合う精神で生きたいものである。大きな船（政府や企業）の船頭は、のんびり屋のゴクラクトンボぐらいでちょうどよいが、あまりにも目先の利がないあわてん坊でもない。人類の終末時計が残りあと何分とか焦らずに、汲々とした世俗を超え、悠然と過ごしたいもの…。

地域に眠る埋もれた歴史（46） 木村 進

皆様、あけましておめでとぅございます。

この「地域に埋もれた歴史」として、2015年の4月から今までに45回の記事を書いてきました。ここに少し振り返ってまとめておきます。

1・6 かすみがうら市出島地区

7・10 真壁地区

11・12 常州牛堀と横利根川

13・15 潮来と延方

16・18 水郷潮来

19 芭蕉の鹿島紀行と月見の寺

20 吉田松陰の銚子見物

21 消えた真鍋公園と子規の宿

22・23 玉里地区

24・25 高浜地区

26 三村地区

27 関川（井関・石川）地区

28・32 茨城廃寺・舟塚山古墳方面

33 鹿の子遺跡と五万堀古道

34・35 常陸国分僧寺跡・国分尼寺跡

36・37 石岡に残されている道標3つ

38 ふるさとはどこに なぜ「地域に眠る

埋もれた歴史」の掘り起こしなのか？

39 四つの佐志能神社

40 六部台（桑谷）廻国記念供養碑

41 常陸大掾氏と関東平氏・源氏の流れ

42 多気太郎

43 常陸（多気・吉田）大掾氏

44 常陸国府跡 府中城跡

45 常陸府中藩（小石川播磨屋敷）と陣屋門

・常陸国総社宮

【石岡のおまつり】

さて、今回は石岡地区の総鎮守である「常陸国総社宮」をとり上げたいと思います。今や関東三大祭をウェブ辞書で引けば「石岡のおまつり」が出てきます。一昔前までは、三大祭とは嘘っぱちだ、そんな話は聞いたことがない、などといわれ地元の観光に携わる方達もその自信のなさをそのままに出したり引つ込めたりと右往左往しておりました。最近では関東三大祭はもとより、「石岡のおまつり」は、本当は常陸国総社宮の例大祭という」とNHKなどにも説明がでるようになりました。でも私はあまりこれらの話を聞くと足元がぞわぞわして気持ちが悪くありません。まあそれでも、これは間違いだからこんなことを言うのは反対だなどと言うつもりはありません。でも歴史的な事実を捻じ曲げたりして、その土台が揺るぎそうな上に座るなどということは坐り心地が良くないことです。そのためには事実が事実として認識することが大切だと思います。歴史的に見れば日本は藤原氏台頭の時から、いやそのずっと前から歴史を隠して権力者の都合で良い所だけを表に出して、気に入らないところは隠し、捻じ曲げてきています。これは日本だけでなく世界中全ての国で行われてきたことです。で致し方ないのかもしれない。また日本では、明治維新の廃仏毀釈で寺の仏像や建物を壊し、すべて天皇を中心とした神道が昔から続いていたかのように今でも語られています。でもこれだって明治以降に変わったといっても良いでしょう。

さて、歴史的な事実だけを書けば、常陸国総社宮の例大祭（秋）は重陽の節句である9月9日に神社の氏子たちでお払いをして祝ってきました。そ

れ以外の行事としては角力（相撲）を奉納する行事が江戸時代から続いています。

明治33年に常陸国総社宮が郷社から県社に昇格したので、このお祝いに何かお祭りをやれないかということになったのです。石岡が常陸国の国府であり、他の国府には盛大な祭りがあるところが結構あって、その頃は、明治28年に鉄道が開通し、高浜の汽船も輸送としては大きな役割がまだあり、酒や醤油の醸造業と製糸業などの産業も意気盛んでした。そこで、石岡の商人たちや街の人々は賑やかになる祭りに石岡人としての意地を表したいとねがったのでしよう。そして各町で知恵を出し合い、この町にふさわしい祭りを一年かけて練ったといえます。

そして今の祭りの原型ができました。それには昔市内の中町にあった天王社（後に八坂神社）で行われていた祭りが一つの参考になりました。街の中の地区（町）単位に区があり区長さんがおりました。この区長さんたちを中心に自分たちの町の出し物を考えてもらったのです。当然昔あった天王社のお祭り（祇園祭）の出し物も参考になったのでしよう。

そして祭りを続けるために金銭的なこともあり、祭りの担当町（区）をもちまわりで行うことと成りました。今で言う年番制度の始まりです。明治35年8月29日に当時、元真地にあった町役場の2階に区長さんが集まり年番の順番を決めるくじ引きを行うことになりました。用意されたくじの本数は16本でした。でもどういうわけかそこに集まった区長さんは17人でした。そこで貝地町には最後に回ってもらい残りの16町でくじを引いたのです。

そして祭りの担当の順番は、森木（寺本）町／大

小路／土橋町／金丸町／守横町／富田町／仲之内町／宮下町／青木町／幸町／国分町／中町／若松町／泉町／香丸町／木之地町となりました。貝地は最後に廻る予定でしたが、17年後にはまた最初に戻されてしまいました。また木之地も町の規模が小さいということで昭和27年に年番を辞退しています。

お祭りの出し物ですが、それまでに石岡に伝わっていた獅子頭、獅子舞いなどを取り入れ、また江戸（東京）で使われなくなった山車を参考に作り、上に載せる人形を江戸の人形氏の所に買い付けに行き調達したのです。何の人形を選ぶかは、まあ金のあるところから早い者勝ちですね。買いに行ったら丁度この人形だけしかなかったなどということも話には聞きます。

最初はこの祭りもなかなか人を集めたりするのも大変だったようで、特に山車の上で踊ったり笛・太鼓などのお囃子が石岡の市内には残っていないかったため、近隣の染谷や三村の方から昔ながらのお囃子をする人もお借りして最初のうちはやっていました。今は石岡囃子として技を覚え、すっかり板について祭りを盛り上げてくれています。この祭りも「祭り好き」が集まって年々賑やかになっていきました。

総社のお祭りということで、最初は例大祭の重陽の節句に合わせて3日間行うこととしたのですが、敬老の日（9月15日）が休みということで敬老の日を中心とした3日間となり、ハッピーマンデー法で敬老の日がずれたのでこの日に合わせて祭りも後ろにずれました。

しかし、総社宮の正式な例大祭はそのまま重陽の節句の9月9日のまま行われていたのですが、最近はこの例大祭も9月15日に変更となったよ

うです。

【総社宮の創建】

さて、お祭りの話はこれくらいにして、総社宮の歴史を調べてみました。しかし、この歴史についてはあまりはつきり書かれたものがありません。石岡市史や石岡の歴史などの書物にも詳しく書いたものが見当たりません。総社文書などが保管されていますのでこれを読めばある程度はわかるのかもしれませんが、私にはこれを調べることもしていませんので今わかる内容だけを記しておきたいと思います。

一般に総社という神社は、諸国の国府所在地に多くあり、それぞれの国内の一宮、二宮、三宮などの神社を合わせて祭り、国司がそれらすべての神社を参拝するのに代えたとする説が有力とされています。この総社が全国的に始まったのは平安時代中ごろから後半といわれていますので、奈良時代などにはまだ存在していなかったように思います。千三百年前からあるというのは考えようがありません。府中古事記には総社明神は国内の明神大社七社の神である、鹿島大神、静神社、吉田神社、大洗磯前社、酒列磯前社、稲田神社、筑波社の神々を合祀すると書かれているのですが、これらの神社の神様と現在の総社宮の神様は明らかに違います。

現在の総社宮の祭神は、「伊弉諾尊（いざなぎのみこと）」「大國主尊（おおくにぬしのみこと）」「素盞鳴尊（すきのおのみこと）」「瓊々杵尊（にぎのひこ）」「大宮比売尊（おおみやひめのみこと）」「布留大神（ふるのおおかみ）」の六柱です。これは日本の神話に出てくる主だった神様です。武蔵国総社の東京府中にある大國魂神社は主祭神が大國魂大神でそれ以外は武蔵国の

一宮から六宮までの六柱を祀っているのとは異なります。どういふことなのでしょう。



総社宮の創建についてはあまり明らかでないのですが、最初のうちは現在の国分尼寺跡近くの尼寺ヶ原付近に「六所の宮」として創建されたといえます。またその時期は10世紀頃ともいわれますがこれも明らかではありません。現在地に移ったのは、大掾詮国（だいじょうあきくに）が府中城を現在の石岡小学校がある地に築城した14世紀中頃、あるいはもう少し早く、12世紀中ごろではないかと考えられます。その後大掾氏が滅び、府中城が焼け落ちた1500年頃は現在地から町の北側に一時避難していたという話も聞かれます。今回は総社のお宝を少しだけ紹介します。

亥年の初めに

兼平智恵子

謹んで新年のお祝詞を申し上げます。

皆様には幸多き新春をお迎えの事と存じます。

旧年中は当「ふるさと風」のご愛読と、石岡市まちかど情報センターにおきまして(三十・六月一日)のふるさと風の物語展、そしてふれあいの里石岡・ひまわりの館におきまして(三十・七月十六日)ふるさと風劇団「ことば座」公演、また石岡市情報センター(三十・十一月十七・二十一日)におきましてのふるさと風の会「風のことは絵展」には沢山のご来場とご支援を頂きました。心より御礼申し上げます。

亥年の今年は十二支では最後の年となりますが、お蔭様で会報「ふるさと風」は十二支よりさきにかけて十三年目に入ります。会員も現在は九人にとぎやかになりました。月初めの会報作りと月末に勉強会(雑談)を行っています。

「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」と題して、ふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。また会報へのご投稿もお待ちしております。今年もどうぞよろしく願いいたします。

いそががず

のんびりと

しあわせ

しっかりと

智恵子

歳を重ねるごとに月日の流れが早すぎてついに行くのが精一杯のこの頃です。

今年の干支「亥」は、もともと干支につかわれた漢字は動物を表したのではなく、天体の動き

から暦を表わすのに使われていたもので季節によって移りかわっていく植物の様子を表した漢字だったという。

今よりもずっと植物が身近で大切なものであった農耕時代、植物の成長の様子を知るための暦はとても重要な役割を持っていました。それが動物に当てはめられるようになったのは、昔の中国で干支を発明した王允という人物が「人々が覚えやすいように」と動物の名前を当てはめて、普及させたことが始まりだと言われている。

亥年は、十二支の中では最後の年で、十二支を植物の一生と考えると、戌年でたわわに実った果実が種子となり、エネルギーを蓄えて次の世代へと向かう準備をするという意味の年と言うことだそうです。

ちよつと興味を引く亥年生まれの性格についての話を目にしたので紹介します。

・長所：猪突猛进で何事にも真つ直ぐ、我が道を行く強い意志を持ち、その強い意志で、コツコツと努力し目標を達成していくタイプ、正義感が強く弱い人がいれば助ける優しい心と悪にも怯まない強さで周囲から信頼出来るリーダー的存在として頼られます。

・短所：強い意志があるため、頑固で厳しく、人の話を聞かない、自分の考えを曲げようとしない。また優しい心の持ち主なので騙されやすく、優しい人間をうまく利用しようとする人があるのので気をつけましょう。

過去の亥年に気になる出来事が起こっている事に注目です。

一九二三年に関東大震災、一九三五年に静岡中部地震、一九四七年にカスリーン台風、一九五九年に伊勢湾台風、一九七一年十勝沖地震、一九八

三年三宅島噴火、一九九五年に阪神淡路大震災。ただの偶然とは思えない過去のデータに驚くばかりです。

昨年は六月に大阪府北部で、九月には北海道で大地震発生、七月には西日本を中心に全国を襲った豪雨と災害が続きました。

被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます、復興が順調に進み、一日も早くもとの生活に戻れますようにお祈り致しております。

自然の猛威は容赦なくやってくることを心に止め日頃の災害対策や事故に会わぬように心がけが大切と再確認の新年でした。

龍泉洞

小林幸枝

2019年、明けましておめでとうございます。2018年は、日本国内で大きな災害が多発した年でした。6月には大阪北部地震、7月には西日本豪雨、9月には北海道胆振地震が連続して起こり、それぞれ大きな被害がありました。被害に遭われた皆様には改めてお見舞い申し上げます。

岩手県北部にある龍泉洞は、山口県の秋芳洞、高知県の龍河洞と並んで日本三大鍾乳洞と言われています。龍泉洞の特徴は世界一の透明度を誇る地底湖であることです。

湖の透明度と言えば、シベリアのバイカル湖が有名ですが、1967年の調査で、龍泉洞の地底湖の透明度が41.5メートルで世界一と認定されました。この透明度は、今も世界一です。

昨年(2018年)の五月の連休に龍泉洞に行ってきました。

洞内はあちこちから出水しているため、地底湖に着くまでにびしょ濡れとなり、寒さに震えてしまった。しかし、ドラゴンブルーに輝く地底湖に着くと、そのあまりに神秘的な美しさに驚きと同時に恐怖すら思ってしまった。

地底湖は三つあり、第一地底湖は水深35メートル、第二地底湖は38メートル、第三地底湖は98メートル。第三地底湖の岸には、万一の事故に備えて浮き輪が置いてあります。湖底にはライトアップされており、ドラゴンブルーの美しさを十分に見せてくれますが、湖底を覗き込むのにはかなり勇気がいりました。

ドラゴンブルーの湖底を見ていたら、龍泉洞の謂れとなった水神様の龍に湖底に引きずり込まれるのではないかと心配になり、慌てて首をひっこめた。

この龍泉洞は大雨が降ったりすると冠水で立ち入り禁止となるそうですが、透き通った青の地底湖は、ここに水神様が棲まわれていると聞いても、確かにここは神の居る湖だと納得させられる、美しく神秘的な地底湖でした。

無表情

伊東弓子

この頃、心の叫びである喜怒哀楽の表現が失われてきているように思う。一人一人の持ち味である顔という看板も、表情が失われて無表情の人が多いようで怖さを感じる。スマホの影響ではないかと思うがどうだろう。会話をしなくても用が済む。知識を得られる。大切な時間を無制限に使える。自分を中心とした世界だ。そこには人との係

わりを拒否する壁がある。これでは人としての豊かさなど育つ筈がない。

一番心配なのは子供達だ。母親たちは立ったままスマホを使っている。幼子が「ねえねえ」と声をかけても答えていない。否「待ってなさい」と、片づけられそのまま。こういう情景はよく見かける。子供は何を思い、どう対応していくのだろう。

レストランでも父親はよく子供と話したりしている。食事をしている母親はスマホに夢中の姿をよく見る。父親は子供と楽しそうだ。でも母親に注意したりはしていない。何のためにここにきて食事をしているのだろう。夫婦で子育ての話しているのだろうか。夕食づくりもスマホ片手にやっている。味はどうなるのだろうか、それでも親や姑たちも口に出せない。出さないのが現状だ。

私も納税の窓口で、敬老会の件で、障害を持っている人のことで相談に行った時のことだった。役人独特の雰囲気もあったが無表情の上に、言葉の柔らかさもなかった。私の説明の仕方が悪かったかと思っただけ、私もカチーンときて、姿勢を正してももらいたくて反論した。個性かも知れない。スマホの所為だとは言えないが、これからは老人も一つ一つに耐えていかなければならないと、淋しくもなる。

そんな中で一ヶ月位前のことだった。一週間に凝縮したかのように起きたこと、人間らしくある種のこと言えばそれまでだが、心あらわにした人たちに合った。あの朝はとても冷えていたが、散歩の私も犬も元気に出かけた。顔馴染みの青年に合った。家の前で話が始まった。話が長引いたこともあってか、息荒気に母親が「ほら、止めな。長くなるよ」「わかんないの」と寄ってきた。朝の忙しい時に相手のことも考えずに喋る息子のこと

を咎めてのことだった。親の気持ちも分かる。私はその子との交流も大切にしたいと思いつながら別れた。その日の昼一寸前、ある友に暫くぶりに合った。友は小高い屋敷の上。私はフェンスの柵を間に道路沿いに自転車止め挨拶する程度と思っていたが、二時間近くの立ち話となってしまう。活動しているグループでの不満、近所、隣りの付き合い方、生活環境の違いから来るもの、勿論個性的なものもあるし、リーダーもしっかり勉強してもらわないと、ごたごたのもとを作ることになり、問題は多い。

次の日行った友の家でも、母と娘の言い合いを聞いた。農家の嫁として確り生きてきた母。自分の生活をたたくで田舎へ戻ってきた娘。お互いに相手をお願いやりながらも肉親としての甘えが、言い合いとなることも許して聞けるのも、他人事だからか、と母と私の遣り取りもそうだったかと振り返っていた。

三つの係りは私個人への怒りではないとしても、思うことは多かった。それにこんな大声で怒る姿を目にすることは少なくなった。家の中で殆ど一人で生活していると、相手に打ち付けるものはない。そんな淋しい生活を静かだといえはそれまで、体の昨日も衰えていくばかりだ。

それから何日も経たない中に、職場の上司と職員の話が耳に入った。秋空が続き紅葉も一段と美しさを増した頃だった。物凄い叱りようだったと聞く。私自身が耳にした訳ではないが想像はつく。それにはそれなりの理由もあったろう。立場上の叱り方もあったろう。パワハラ、セクハラ等々世間では騒がれているが、そこはそこの風が吹いていた。人の目には紅葉の美しさを称えていても、自然界の中では楓も、銀杏も、柿も、栗も

競い合っているのだらうと思つてみた秋だった。怒りをはっきり出してゐる姿には驚いたが、スカッとした気持ちだった。

先日、知人宅のお葬式でお坊さんのお話を伺つた。その中に「人は自分を護るためにも、一人だけでなく多くの人と、怒り＝疑問を解決すべく、仲間と力を合わせていこう。これから、敬老会の祝い品について市民の立場で考えていきたい。平等合併した筈の市なので、各地区の品を祝いに加えてほしい。合併は十二年間ヨーロッパ類一色。ある地区の物だけだった。例えば小川地区の納豆、にら餅、玉里地区の小魚、佃煮などというふうを考えてほしい。合併十二年経つて地区に拘るのはまずいだらうか。

ある店で買い物していた時、若い母親が抱っこしている半年にも満たない赤ちゃんにスマホの絵柄を見せていた。赤ん坊は目を動かしていた。ああ、こうやってスマホづけになつていくのだ、と驚き、御節介に「スマホよりお母さんの話しかけを大事にしてね」と言つてあげた。きよんととして私を見ていた。これからあの母親は何と考へていくだろう。人間が言葉を失つて、表情もなくなつていったらどうなるのだろう。ロボットが人間に変わつていくのだろうか。

我が労音史 (3)

木下明男

参加した労音運動からいろいろ学んだのですが、1970年からは実際に労音運動の活動家として参加してきました。この我が労音史では、自分が実践の中から学んだことを振り返り記述していきます。

1972年の社会情勢と音楽状況

全国民の悲願、沖縄の施政権が返還され沖縄県が誕生し、知事には革新統一の屋良朝苗氏が選出された！佐藤内閣の退陣と田中内閣が生まれた中で、共産党が議席に躍進し、革新自治体は全国100都市になるなど革新を求める世論が高騰。田中角栄通産大臣の政権構想の柱「日本列島改造論」が発表された。ニクソン大統領が中国を訪問し、佐藤内閣が総辞職し田中内閣が成立した後日米首脳会談が開かれその後、日中国交が回復した。この年連合赤軍事件（浅間山荘籠城事件）が起こり、イスラエルのテレアビブ空港では日本人ゲリラが小銃を乱射して多数を殺害。グアム島のジャングル元日本兵横井庄一が発見され28年ぶりに帰国。奈良県明日香村高松塚古墳から極採食の壁画が発見、老人福祉法改正で70歳上の医療費無料化が実現。海外演奏家（団）の来日公演が増加し、その入場料は法人演奏会の倍以上、そして日本演奏家の活動を圧迫した。フジテレビ・文化放送が日本フィルの専属契約を突然打ち切り、日フィル労組は撤回を要求して立ち上がり、著名な作曲家・演奏家・評論家70名がこれを支援し、その輪は大きく広がった。音楽人会議が「音楽行政」に対する要望書を革新都政に提出し、音楽家・舞踊家3団体8名が入場税撤廃の要望書を各政党へ提出した。日本演奏家協会が発足し、国際交流基金が開設された。団伊玖磨がオペラ「ひかりごけ」を作曲して大阪で発表、小山清茂が歌劇「山椒大夫」を、高田三郎が「蒼き狼」を作曲し、秋の芸術祭で初演された。ヤマハが、此の年より優れた素材の発見を目的として「ヤマハ・ポップコーン・コンテスト」を開催して、中島みゆき・八神純子等の新

人を発掘・育成し、シンガーソングライターの誕生、ニューミュージックの作曲販売を展開。吉田拓郎の「結婚しようよ」が大ヒットして、反戦フォークからの変転を指摘された。また、東海林太郎や柳家金語楼、川端康成が「逝去」。

1972年の労音の動き

この年7月に開催された第20回東京労音総会では、労音運動を取り巻く情勢分析と問題点を抽出

① 客観情勢の変化に例会内容が対応しきれていない

② 主体的力量が弱体化している

此の二項目を確認して、新三か年計画で

1. サークル活動の促進

2. 会員の総意を集めて、年間企画立案（例会）を充実させる

3. 運営制度の改善（入会金・会費・受付方法等）

4. 活動家の育成

を活動の重点として、初年度の拡大組織目標15000名を掲げて取り組む。その結果、会員拡大では90%を達成し、40余の例会を満席にした。運営制度の改善の中で、入会金制度と入会金についてはサークル代表者会議で検討したが、労音運動の根幹に関わる重要な問題を含んでいるので継続討議になった。会員減少による一般経費（宣伝費・事務局経費）の相対的な増大を抑えるため、各出張所の自主管理（除八重洲）更に事務局員8名の解雇を実施した。

アメリカのベトナム侵略強化の影響でベトナム歌舞団来日が延期された事に対し「ベトナム人民支援音楽会」を総会の記念行事として、文化団体連絡会議と共同して開催した。これに労音の演奏

サークル（労音合唱団・民族音楽研究会）が出演した。新しい取り組みとして、新作オペラ「かくも長き不在」（外山雄三作曲・中村俊三演出・成田絵智子・ビゼーの「カルメン」）原典版（中村俊三演出・外山雄三指揮・労音合唱団）が上演され、クラシック演奏会に新風を吹き込み大きな反響を呼んだ。大木英子の新作コンチェルト「愛と死」の初演も話題を呼んだ。ポピュラー関係では、ダークダックスがベトナム従軍記者嶋本啓三郎の遺作集を基に構成された「彼はベトナムで死んだ」が感動を呼んだ。上条恒彦の創作組曲「銀河の夜を旅する人」が上演され、人を愛し人を大切にするテーマが大きな反響を呼ぶ。更にペギー葉山の構成組曲「戦争を知らない子供たちへの子守歌」が初演。他に、赤い鳥・五つの赤い風船・長谷川きよし・浅川マキ・アイジョージ・尾崎紀世彦・岸洋子・布施明・佐良直美・朱里エ子・坂本スミ子・松岡計井子・伊東ゆかり等のコンサートが実現。また、「今陽子・上条恒彦ツードアショー」「いずみたくリサイタル」等の大型例会や日生劇場のアプローズの買い取り例会が実現。海外からは、ジルベルベコー・ミルバ・マルウォルドロン・クロードチャリ例会が実現。

伝統音楽・伝統芸能関係では、前進座による有吉佐和子の小説「出雲の阿国」の戯曲家・上演、花柳徳兵衛舞踊団、日本音楽集団、人形浄瑠璃・文楽、岡本文弥の新内、山本邦山の尺八、高橋竹山の津軽三味線、労音寄席（小さん・正蔵他）等を幅広く取り上げた。文楽例会では、人形の動かし方や歴史などを実演を交えて解説する文楽教室企画、文楽を理解するのに役立ったと大好評を得た。岡本文弥の新内は、初めて聞く人にも理解しやすく、庶民の生活感情を切々と唄い込んで、聴衆に深い感銘を与えた。ジャンルと関係なく、優れた演奏・

芸能家を同時に舞台で紹介した「永六輔とその世界」は、内容と構成の意外性、出演者個々の持ち味が発揮され、熱気に満ちた舞台となった。

翌年度（⁷³年）の企画を決める（年間企画を決めるための地域会議）が東京各地で行われ240サークル300名が集まり討議が深められた。例会外活動として「新年の集い」で各サークルからの出し物や模擬店が出され400名の参加で交流が深められた。上越国際スキー場で開催されたスキー友好祭は1700名、芦ノ湖で開催された「夏の友好祭」は2000名が参加し連帯の輪が広がられた。4月には、沖縄の無条件全面返還を促進する「本土と沖縄を結ぶ民族芸能のタベ」が、労音や音楽家（団）民主体と上京中の沖縄文化代表団等で開催（九段会館）専門家による伝統芸能と演奏サークルの民族音楽研究会の「新曲さくら」で満席の会場を盛り上げた。

全国の労音運動停滞傾向の克服を目指した第18回全国労音連絡会議が11月に労音会館で、157労音436名の参加で開催された。労音運動25周年（⁷⁴年）に向けて会員拡大・年間企画の確立・財政の健全化・機関紙『月間労音』の5万部拡大等、総合的な新三ヶ年計画の樹立を決定。この会議の夜「音楽家との懇談会」が開催され、谷桃子・清瀬保二・小池夢坊・内田るり子・見砂直照・すぎやまこういち等82氏が出席し各地労音代表との交流を深める。また統一規格として、オペラ「かくも長き不在」29回、歌劇「沖縄」11回、ミュージカル「死神」48回、オペラ「カルメン」8回、いずみたくリサイタル8回。特筆する事として、うたごえ運動の中から生まれた歌劇「沖縄」（外山雄三／村川千秋指揮・新星日響・中央合唱団）の全国公演は、日本の勤労者の音楽運動の双壁（うたごえ運動と労音運

動が協力して成功した。塩尻、気仙沼に新しく労音が誕生、全国の会員数16万8千人に。

1972年の私

労音運動に参加してから6年、毎日毎日が労音中心の生活。労音南部地域（天田・品川・神奈川）の中心活動家から東京労音の組織部副部長として、毎月運営委員会や組織部部長会議、組織部会等々月に10回以上も、水道橋の労音会館に通うようになる。また、全国の会議にも参加し、関東・東海・東北の労音が参加した友好祭の実行委員長として、多数の活動家を指導する。二人目の子供が出来、嫁さんの病院勤務も永くなり、色々責任を果たさなくては。夫婦で話し合った結果、嫁さんの姉が横須賀に住んでおり、家を新築するので一緒に住まないかとの誘いを受ける。二人の子供を見て貰うことで、通勤時間は厳しくなるが（片道2時間）活動の幅が広がるので、同居をお願いすることになった。

つづく

父のこと 5（平成の終わりに）

菊地孝夫

明けましておめでとうございます。しばらく前から書かなくなった年賀状の代わりに、誌上をかりて読者の皆様にご挨拶申し上げます。年賀状の枚数も、次第に少なくなつて、今年はおそらく一通も来ないと思われます。

戊年から亥年へと干支が変わったわけですが、旧暦でいくとまだ年明けとはなっていないのです。

師走にもならないうちから、早々と年賀状を書くのもどうかとは思うのです。昭和の時代、交際範囲の広い人は数百枚書いていましたから、一枚一枚手書きしていたのではとても投函するのに間に合わず、子供の頃の思い出では、毎年、年末になると父の差し出す百枚を超える年賀状のあて名書きをさせられたものでした。

悪筆で、兄や妹、母の方がずっとうまい字を書くのになぜ私にさせたのだろうか？習字の練習の為かなとか

こども心に恐ろしかった父の命令だから、
「酒なんか飲んでいる暇があったら、自分で書きゃいいじゃないか」

とは内心では思ったがとても口に出すことはできず、自分の十枚ばかりの年賀状を書き終えろと、せつせとあて名書きをしました。あとになつてからは裏の文面も書くようにといわれました。

父は海軍時代におぼえた喫煙をしていたので、タバコがなくなると、私に小銭を渡し、「いこい」「しんせい」という両切りのタバコを買ってくるようにと言いつけました。そのお釣りは小遣いとしてくれたから、この時ばかりは喜んで命令に従ったものでした。どうして私にばかり言いつけたのかもいまとなつては不思議である。

これは全くの想像だが、海軍士官だった父は通信基地勤務では、当然従卒の、少年のような二等兵あたりが付き、食事、洗濯などの雑務は一切しなかったはず。それで私を従卒代わりこき使ったのだろうか。祖母がとつておいた父の「桜に碇」の軍帽があったのでそれをかぶり、ふざけて敬礼すると、

「敬礼の仕方はそうじゃない」
と言って何度もやり直しさせられたものでした。

士官には士官の敬礼のやり方があったようだ。海軍士官と陸軍士官とは敬礼の仕方が違ったようだ。

専門の印刷屋さんで年賀状の印刷を頼む人も多かった。

「カナモジ会」に属していた祖父・龍夫からは私宛にカタカナの年賀状が届いた。会長は確か商社の「伊藤忠」の伊藤社長である。ロゴも（C・ITO）である。

除夜の鐘が鳴る前に、兄と二人、近所の総社宮へ「元朝詣り」に出掛けました。参道は砂利道で、ザクザクと踏みしめて歩きました。拝殿の手間の木戸は閉じられ、スピーカーから流れる除夜の鐘がつき終わると同時に、みんなで一斉に賽銭箱の前に駆け寄りました。一等賞を争ったのです。あの年は二・三着の時もありました。

元旦になると、自転車に乗った郵便屋さんが束になった年賀状を配達してきてくれる。配達をいまかいまと待ちかね、玄関先に出て受け取ると、子供たちはさっそく畳の上に広げ、家族それぞれに配ったものでした。

そのあと一家で百人一首をする。

それに飽きると、坊主めくりをしたり、トランプの「七並べ」「五一」「ババ抜き」「神経衰弱」「コバック」「ブリッジ」。新聞の福笑い、クリスマスに買ってもらった「コピットゲーム」「バンカース」などのボードゲームをした。将棋や五目並べ・ある年には従兄妹の家に大勢の従兄弟が集まりゲーム遊びに興じた。時にはゲームで負けて悔し涙を流して。

火鉢の網にもちを載せ、海苔巻や黄な粉餅で食べる。

炬燵の上にはささやかなおせち料理が並ぶ。二

シンの昆布巻き、栗きんとん、伊達巻、かまぼこ、田作り、数の子、くわい、みかん。

夕方には再び雑煮を食べ、あらかじめそれぞれに食べる枚数を聞き、火鉢で焼く。

遊び疲れ、餅で満腹になった少年は早々と眠りについた。

読み終わった年賀状は、後日回収して畳の上に末尾の番号順に並べお年玉の当選番号と見比べたものだ。ほとんどが四等の切手シートであった。稀に三等の封筒セットが当たった年もある。

雑煮を食べ、時にはお屠蘇も飲み、父と祖母からお年玉を貰うと、子供たちはそろって親戚のうちへと出掛ける。目的はもちろんお年玉である。祖父・龍夫や叔父・将実、叔母・久子などに会えばお年玉が手に入った。

それを手に、おもちゃ屋の「カギヤ」で凧や凧糸を買った。

凧のしつぽには新聞紙を細く切って糊でつなげ貼り付けた。糊が乾くのを待って、晴れた正月には石岡小学校の校庭へ行って兄弟で凧揚げである。近所の少年たちも幾人か来ていた。

年末のちょうど今日あたり、一月二十八日には未明の深夜、兄と二人、宮下町の農家まで餅を受け取りに行った。

母に起こされ、真つ暗な道を、着膨れした体で農家へと向かう。不思議に寒さは感じられなかった。明りのともった広い土間では、すでに餅つきが始まっていて、頼んであった家の分が搗きあがるのを待つ合間に、搗き立ての納豆餅やら餡餅、おろし大根の餅などをおかみさんが振舞ってくれた。アツアツの餅をたらふく詰め込み、両手いっぱいに申し餅と鏡餅を持って帰路に就いた。今は亡き兄との懐かしい思い出である。

菊地家でもどうしたとか、一度だけだが餅つきをしたことがある。その時はさすがに無精者の父も手ぬぐいで頭を包み、物置から出した臼と杵を庭先に置き、蒸しあがったもち米をべったんべったんをついた。向かいの倉田さんのうちからも餅つきをしている音が聞こえてきた。隣の大和田仁治さんのうちには門の前に門松が飾られていた。

暮れになると畳をはがし、庭先でたたいて一年間にたまったほこりをたたき落とした。

障子を外し、水洗いして新しい障子紙を張った。糊は祖母・あきが小麦粉を似て作ったものを刷毛で棧に塗り広げ、そこにしわにならないように気をつけながら障子紙を張って行った。

冬休みになつていたとはいえ結構な忙しさである。母・サトにとつて年末は料理・洗濯・掃除となおさら忙しかったことだろう。洗濯機も冷蔵庫も掃除機も電子レンジも炊飯器もなかった時代のことである。

ここらが菊地家の年末年始の風物です。

街中は、初荷と書かれたのぼりを翻した小型トラックが走り、八百屋の店先には高々とみかんの木箱が積み上げられていました。商店にも立派な門松やしめ縄が飾られ否応なく新年の雰囲気があふれていました。

今はパソコンとプリンターさえあれば、カラー写真付きの年賀状が簡単につくれる便利な時代となった。

一廻り前の干支の年には、リーマンショックがあった。株価は年末に向かって下落を続け、あわや二万円台を割ろうか、という処でかろうじて踏みとどまった。新年の初値はこの号が出るころは判っているし、街はもう松の内を過ぎ、正月気分

も失せたころなので、仕事もとづくに始まっていて、年頭の経済状況がどんな展開になっていくかわかっているはずだ。「大発会」で2万円を割り込まなきやあいいがと思う。

毎年、年末に刊行される週刊誌の新年号特集は、「来年の株価予測」というのを載せる。去年か一昨年の号には株価の二万五千円台突破は間違いなひとの大方の予想が載っていたが、あにはからんやそのような事態は到来しなかった。

兜町の株式相場の猪年の格言がもし的中すれば、波乱の年となるだろう。戌年に様々な天災に襲われた日本列島が、平穏な一年となることを願っている。

また、会員諸兄の上にも、陰でこの「ふるさと風の会」や「ことば座」を支えてくださっている方々の上にもいい一年となることを祈願します。多くの読者の方々にも、いい一年となりますように。

早くも連載も十回を数え、ありがたいことに、ちらほらと読者の感想を聞ける機会もあり、初めて自分の文章が活字となつて、人目に触れる機会が与えられたことに感謝もしています。

「そろそろあなた自身のことも読みたい」「あなたのことはいつになつたら出てくるのか」と複数の方から言われもしました。それらの方々にはもうしばらくお待ちいただきたい。

年が改まつてからも、より一層の研鑽を積み、少しでも「面白い」、と言われるようなものを書きたいと思っています。

何だか、へたくそな政治家の所信表明みたいになつてしまったので、ここらで本題に戻ることにしましょう。

今から十年ほど前の日記に、この石岡には文化

人と言われるものが一人もいなくて、すぐ隣の八郷町には「ゆう」という年間誌があつて、多くの読者を抱えているというのに、隣の石岡にはそのようなものが無いじゃあないか。歴史と伝統を標榜するこの石岡だつて、そのレベルの人がいたつておかしくなろう。というようなことを書いている。

石岡市報の末尾に、打田先生の短文が載つていて、それぐらいが唯一見るべきもの、との認識でした。よく調べれば、優れた先人たちがいたので、それにわたしが気付かなかったというだけのことです。いまになつては恥ずかしい限りです。

今年の春からは安いテレビを買つてきて、テレビ放送が地上波に切り替わつて以来だから、7年ぶりにテレビを見ました。とはいっても大半が海外の劇映画です。画面もブラウン管と違つて綺麗で、もっと大画面ならいいなと思つたものです。映画を見るなら50インチ以上の画面で見ればその迫力が伝わるでしょう。

パソコンのモニターとしても使っているので重宝です。録画機能もあるので、あらかじめ予約しておけば、外出から帰つてきて楽しむこともできます。ポートもついているので外部の記憶装置につなぐことも可能です。付属のUSBは12GBしかないのですが、カラー映画を記録すると、一〇時間分くらいの容量しかなく、まだ試してはいないのですがパソコンの記憶容量が大きいのでそこに映画を撮りためようかと考えています。外部に専用の記憶装置を接続してもよいのですが、高価なため暫くはお預けです。記録可能なディスクを買つてきてそこに撮りためる、という方法も検討中。DVDとも接続したのでレンタルの映像も同時に楽しめる。誠にこうした面では便利な世の中

になったものです。

年末特番の「バック・トゥ・ザフューチャーⅢ」。「ゴッド・ファーザーパート3」と立て続けに見ました。片やステイブ・スピルバーグ、片やフランシス・フォード・コッポラ。どちらもハリウッドを代表する巨匠、大御所である。映画の年代も1980年あたり。「バック・トゥ・ザフューチャーⅢ」のほうは1985年が舞台となっている。「ゴッド・ファーザーパート3」のほうは1979年の教会での慈善パーティーのシーンから始まる。

「バック・トゥ・ザフューチャー・シリーズ」のほうは日本製品がアメリカを席卷していた時代のことで、様々な場面で日本製品が登場する。自動車はホンダ・トヨタ、ビデオはビクター、テレビはソニー。

このころのアメリカ映画を見ると、都会には日本の企業のネオン・サインがあふれている。

「キャノン」「TOSHIBA」「HITACHI」「PANASONIC」「SHARP」

市場を日本製品が独占していた。ほんの40年前、アメリカにコテンパンにやつつけられた国とは思えない。」

遊び心溢れるさまざまなSFのパロディーが全編に満ち満ちている。SFファンにとってはたまらない映画となっている。

主人公のマイケル・J・フォックスは「クリント・イーストウッド」と名乗り、一八八五年にタイムトラベルした冒頭のシーンでは西部劇でおなじみのアメリカ・インディアンが奇声を発して登場する。それを追って騎兵隊の一隊が突撃ラップとともに登場する。続くシーンでは「セブン・イレブンで射撃の腕を磨いた」というセリフまでも

が登場する。準主役のマッド・サイエンティスト（SF小説にはつきものの、頭のいかれた科学者）の博士は「アイン・シュタイン」という愛犬を飼っている。主人公は「スケートボード」の発明者ともなっている。

決闘シーンはイーストウッドの「荒野のガンマン」のパロディーである。前作では、まだ登場前のロックン・ロールを披露し、足にはスニーカー。ラブシーンではジュール・ベルヌの「月世界旅行」や「海底2万哩」といった会話が交わされる。

「タイムマシン」はSF小説の草分けH・G・ウェルズの代表作でもある。

時は1885年、開拓時代の西部。大陸横断鉄道は建設中。石炭ではなく、木炭で走る蒸気機関車が出てきて物語には重要な小道具ともなっている。枕木に大釘を大ハンマーで打ち込む鉄道建設のシーン。大勢の中国人労働者が移民してきて工事に携わった。終わりはもちろんハッピーエンドの大団円。エンドロールに、no・be・コンティニューは出てこない。

一方「ゴッドファーザーⅢ」のほうはまじめな映画の常で、途中で面白くなくなってしまう。柳の下に泥鰌は居ないので前二作の焼き直しの場面に終始する。

時はアメリカがベトナムで敗退したころ。アメリカ国内にはベトナムで心身に深い傷を負った若い帰還兵があふれていた。反戦の機運が高まり、ようやく帰還した彼らに向けられる世間の目は冷やかかなものでした。

全編の底流に流れる暗いイメージは、自信を無くした敗戦国アメリカそのものだ。

当時、公に語られることがなかった、「ソニ村事件」をはじめとするベトナム人に対する残虐行

為は、かわった兵士の中で封印されたままでした。これらの事実が語られたのは九〇年代に入ってから。

「ランボー」が単身乗り込んでいって、敵の北ベトナム兵をかつこよく倒すハリウッド映画と違って、実際には大勢の「乱暴者」が武器を持った数十万の農民を虐殺したのです。二〇〇〇年代に入って出版されたルポを読むと、あまりのおぞましさで半分でページを閉じました。

「ゴッドファーザー3」のラストは第4作の始まりを予感させるもの。興行成績が振るわなかったため、第4作は作られなかった。

残念、ここで枚数が尽きたので他の映画の話は次回のお楽しみ、ということとひとまず幕を下ろしましょう。また次の号でおあいすることといたしましょう。

【風の談話室】

《読者投稿》

やさと暮らし (23)

さと女

「あゝあ！何処か紅葉の綺麗な所へ旅行でもしてみたいな」外を見ながら聞こえよがしに呟くと、後方から「毎日、目の前で黄葉を見ているじゃやないか。此処で十分だろう」と、つれない声が……

●師走

・銀杏の木、其処だけ一段と明るい。朝起きると黄色い絨毯で道を埋め尽くしている。パラパラ落ちるのももう暫くはかかるだろう。美容体操だと思つてせつせと掃き掃除。掃除が終わるころには

うつすらと汗が。

・カレンダーも最後の1枚、師走だと言うのに何と暖かい事。今日は、公民館祭りに行ったり、エコクラフトの友人宅へ行ったりと車を走らせた。その道中の雑木林、ハットするようなモミジの紅葉に出会った。思わず一人感嘆の声を。

・何ともスツキリしないもやもやしたお天気と気分。そんなとき、薬市さんよりランチのお誘いがあり行楽気分で出かけて行く。メタセコイア並木の紅葉もピークを過ぎ落葉が始まっていた。いつもながらログハウスの大きなガラス窓から見る景色には癒される。何処か遠くに出かけた気分。ランチでお腹を満たした後はみんなでこんこんギョラリに移動、此処もホットする空間、素敵な作品が沢山並んでいました。

・義兄の3回忌法要の後毎年恒例の兄弟会、母亡き後兄弟が疎遠にならない様にと兄の提案で始まったこの会も36回目とか。その兄が亡くなり寂しくはなったが、こうして今年も集まれたことに皆で感謝した。来年も元気で顔を合わせられる様に。

●散歩

・今朝も無事、朝の散歩に出ることが出来た。もう、脱走する心配はなくなり、只ヒタスラご主人様の後について歩く。先日獣医さんから「神奈川県では数年前から長寿動物表彰というのがあるのよ、たしか16歳以上だったかな」と話された。と言う事はコロも十分表彰に値するんですね。

・4度目の発作、横に倒れて手足を突っ張り、硬直。今度こそ無理かなと思ひ慌ててマッサージをしていると起き上がり、ヨロヨロ立ち上がった。夕方夫の帰りを待って獣医さんに。その時は平常に戻っていた。1ヶ月前から、飲んでも飲まなく

ても変わりはないかもしれないが、心臓の負担が軽くなるかも、と言う事で薬を飲んでいる。散歩もさせないと手足が弱るだろうし、排尿排便もない。只、食欲だけはあるのですくわれる。

・夕暮れ時、長閑にコロと散歩していると、突然パトカーのサイレンが、マイクで左に寄りなさいと。また捕まった。此処は年中一時停止の取り締まりをやっている。一時停止しつかり確認しよう。

・樺の大木もすっかり葉を落として、散歩道にはまだ紅葉が。キーンと空気が冷たい。葉をすつかり落としたまゆみの木、ピンク色の四角い実、メジロやヒヨドリらしい鳥が止まっていた。道の向かいには美味しそうな菜花、春には一面菜の花畑となる。筑波山の向こうに陽が沈むと夕焼けが、昨日に続き今日も凄い。今日は随分長い間赤く空を染めていた。こんな日は散歩も楽しい、コロも楽しそう。

●寒い日

・一気に冬將軍、今朝はメダカの水も氷っていた、明日はより寒くなるとか。銀杏の大木もすっかり葉が落ち、まるで黄色い雪が降ったようです。県道沿い、きみちゃんの店（池之端）の銀杏の大木も葉が落ち、我が家から筑波山が見えるようになりました。銀杏の落ち葉の始末は気合を入れてやらないと片付かない量です。あまりの寒さに今日は諦めました。

・今日も寒い一日、キーンと張りつめた空気の中ストレッチで体をほぐしての帰り道、四季折々綺麗に手入れされている畑の細道を通った。ここ一帯は荒れているのを見た事がない。一体どんな方が手入れしているのだろう、といつも想像しながら通っている。

・竹細工の日、前回コーヒードリッパを作ったが、少し改良して、今回もドリッパを。以前テレビで長野の方が、竹のドリッパで入れたコーヒーの美味しさを語っていた事があり、師匠にお願した物。ひごが細いので節で何度も折れ投げ出したくなったが、何とか完成。出来上がったドリッパで早速コーヒーを、格別美味しかった。

●イベント・コンサート

・ボランティアをしている「こころの医療センター」でのクリスマス・コンサート。今年はスペシヤルゲストに鬼塚サリィさん。オリジナル曲を中心にいしおかのお祭り応援歌や、アップテンポな歌とダンスで会場いっぱいのお客様を盛り上げてくれました。職員さんによるダンスや、先生のピアノ演奏もあり一足早くクリスマスを愉しんだ。

・冷たい風の中オリーブさんへ、今日は月一回のランチコンサートの日、地元のオカリナサークルの方の演奏でした。童謡や演歌、歌詞を用意して下さりみんなで口ずさみ、またオカリナの生音を始めて聴く方もいて和やかに終わりました。又今回はギターの飛び入りも入り、何曲か伴奏してくれました。演奏の後にはランチを頂き乍らお喋りタイム、お蔭様での楽しい1日でした。

・市民会館で落語会。桂文楽はじめ4人が出演。パントマイムあり三味線による端唄・小唄・漫談ありと盛りだくさんの寄席、お客さんは大笑いした。大勢の知人とも顔を合わせた。今年は連れ合いが市民会館の運営委員になった所為もあり映画3本、ミュージカル、今回の落語と足を運び、近くで安い会費で楽しむことが出来ました。

・若い人のお誘いを受けて師走のひと時、賑やかに過ごしました。巷ではさぞかしジングルベルが鳴り響き、街中は人であふれているのでしょうか。そんな思い出も遠い昔。ここは筑波山へ向かう山の中腹のひつじの郷。若い家族連れ2組、総勢15人、此処だけが賑やかです。みんなで鍋をつつき合いながら、若い人達は楽しそうでした。肉はもちろん《ひつじ》です。私も赤ちゃんのお守りをちよつとだけさせて貰い子育ての頃を思い出しました。

●もろもろ

・今日は冬至、今年も残すところ10日を切り、何とはなしに気持ち焦る。やり残した事は山ほどあるが今更焦つても仕方がない。今日は風の会今年最後の集まり、その後忘年会と言う事で私もお邪魔した。今年の出来事やら来年に向けての事やら、話は延々と、会員さん全員顔を合わせ今年最後の会が終われたことに感謝です。何しろ皆さん高齢ですので。夕方コロとの散歩ではろうばいの花を発見、満開でした。

・今年最後のストレッツ、クリスマスプレゼントにメンバーにエコクラフトのおつまみ入れを。朝起きると程よい風が吹いていたので、急いでニスを塗った。仲間もそれぞれ思いの物を持って来て、まるで物々交換会の様だった。この1年無事にストレッツが出来た事に感謝です。

・朝窓を開けると向かいの窓が赤く燃えている。少し遠くの病院も赤々と燃えて、急いで東の空を仰ぐと、太陽が昇るところだった。今日はマリアーージュにて恵莉子さんのクリスマスディナーコンサート。今回は日本カラオケボックス全国大会に、茨城県代表として出場して、入選したお祝いを兼

ねたコンサートでした。いつもながらの透き通ったきれいな歌声で観客を魅了させてくれました。聴くたびに今後がより楽しみになります。

・知人のHさん、今迄何匹もの犬猫を保護して来た。今年になり保護して家族になっていた犬を亡くした。ネットで保護犬情報を検索していると、なんと亡くなった犬によく似た写真が載っていたと、即座に保護団体に連絡をとると、鹿児島県の離島の観光地のロッジに繋がれていたという。Hさん何とも諦めきれず何度ものやり取りの末、引き取ることにした。そして空輸で羽田空港へ、こちらの保護団体の方と一緒に羽田で引き取り、今は八郷で幸せに暮らしています。1ヶ月経ち先日私も会って来たが、すっかり落ち着き八郷に馴染んでいる様です。Hさん宅の先住民と言うか、先住の犬猫たちとも少しずつなれてきたようです。

《風の吹き》

古代の官職

打田昇三

進歩した現代に昔の話は無用とも思うが、かつては此の様な事で庶民が苦勞をさせられたのであろうから、本来の民主主義擁護の視点から余計なことを書くが、誤りが有ればご教示頂きたい。

現代は中央・地方を問わず公務に従事する職員を「役人」とか「官僚」などと呼ぶが、明治維新以前には官職に在る者を「つかさ」と呼んでいたようである。其の本来の意味は「高いところに居て朝廷をつかさどる（補佐する）」と言う図々しい表現であつたらしい。その為によく多くの、と言うより複雑で小難しい官職制度が定められていた。

例えば、石岡の歴史で必ずと言って良い程に登

場する「大掾（だいじょう）」も地方行政官の一つであり現代の「県庁幹部職員」だが、常陸国は後述べる「親王任国」なので現地に來る上役が來たり來なかつたりで（貰うものは貰う）土着した平氏一族が、平将門事件以降に其の大掾職を世襲し權力を得て其の職名を姓としたのであろう。

今では「古代職制」と呼ばれる往時の官制が定められたのは西暦七〇一年であり、天智・天武両天皇の孫に当たる文武天皇時代に施行された「大寶律令」に依ると言われる。此の時に現代でも用いられている「省」が出來て更に「庁」のような「臺」「府」「寮」「司」や、地方には「職（しき）」「司」「府」などが置かれた。石岡には常陸国府が在り長官の国司が交代で赴任して來た筈である。

ところが其の頃から藤原一族が皇室に女子を送り込んで是を籠絡し、天皇を政治から遠ざけて勢力を伸ばしたから、どういつか皇族が盜賊並みに増えて賄いきれなくなつた。其処で図々しく諸国の中から豊かな國を選んで收入の全てを皇族經費に充てることとした。狙われたのが上総（千葉南部と常陸（茨城）と上野（群馬）の三か國であり是を「親王任国」と稱して皇族を國主とし税収の全ては其の經費に充てた。しかし皇族は盜賊と違ひ身体が丈夫では無いから遙々と東國へ赴任して來るのが辛いし、何よりも都に居なければ出世競争に負ける。その為に入込だけを頂き現地に來ない者が増えてきた。是を「遙任（よういにん）」と稱していたけれども、俗に言う「給料泥棒」であるから、國民が「容認」出來る制度ではない。

大寶律令では公務員（當時は地方官庁に勤務する者も國家公務員）を文官と武官とに分け、さらに都で勤務する京官と地方官（外官）に区分していたが、公務員でも「四部官制」と言う官位が与えられる者と、

そうでは無い者とが居たらしい。主な「四部官」の職は次の様になる。

◎長官―太政官の大臣、各省の卿(けい)、寮などの頭(かみ)、近衛府の大將、鎮守府の將軍、太宰府の帥(そつ)、諸国国府では守(かみ)、他の官庁では長官など。

◎次官―太政官の大納言と中納言、各省の輔(すけ)、寮などの助(すけ)、近衛府の中將と少將、鎮守府では副將軍、太宰府の貳(に)、国府の介(すけ)、他の官庁では次官など。

◎判官―太政官の辨(べん)と少納言、各省の丞(じょう)、各寮などでは允(いと)、近衛府の將監(しょうげん)、衛門府・兵衛府・檢非違使の尉(じょう)、鎮守府では軍監が是に相当し、諸国国府に置かれた「掾」は此の職であるが、国の大小などで大掾から少掾に区分されていた。

◎主典―四部官制の最下位であり、太政官の外記(げき)、近衛府の將費、鎮守府の軍費、そして諸国国府では「目(もく)」が此の地位になる。なお、石岡に「小目代」の地名があり、石岡市史などでは是を古代官庁の跡としているようだが、専門学者の説では「目代とは国守が私的に置いた職」であるらしい。

ところが四部官制など平安時代に用いられていた是らの諸制度は、平家滅亡の後に源頼朝が鎌倉幕府を開き本格的な武家政治を始めたことにより言わば有名無実化してしまった。頼朝首相?は、先ず、摂政関白などが重視していた「家の統制の為の制度」を参考にし、必要に応じて鎌倉幕府の諸制度を拡充したようで、自分(將軍)を中心に「執権」「連署」「政所(まんどころ)」「侍所(さむらいどころ)」や奉行制度を取り入れた。

地方には国守の他に「守護」を設置し、守護の下に莊園ごとに「地頭」を置いた。是により平安時代に繁栄した諸国国府は其の機能が失われ衰退の道を辿ることになった。石岡もそうである。

頼朝が此の制度を敷いたのは弟の義経が自分に逆らった...と言うより、後白河法皇に懷柔され頼朝以上の有名人になったのが許せなくて是を捕らえる為であったらしい。昔の武士は活躍するのも程々にはしておかないと無事では居られなかった。

諸国と言っても、日本全土は其の位置、面積、地形などにより種々の差がある。道・府・県制度が出来たまでの日本は俗に「六十余州」と言われており、時代によつて少し変更が有つたらしいが平安時代には、何を基準にしたかは不明だが概ね次のように区分されていた。

◎大国―大和、河内、伊勢、武蔵、上総、下総、常陸、近江、上野、陸奥、越前、播磨、肥後の十三か国

◎上国―山城、摂津、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、相模、美濃、信濃、下野、出羽、加賀、越中、越後、丹波、但馬、因幡、伯耆、出雲、美作、備前、備中、備後、安芸、周防、紀伊、阿波、讃岐、伊豫、筑前、筑後、肥前、豊前、豊後の三十五か国

◎中国―安房、若狹、能登、佐渡、丹後、石見、長門、土佐、日向、大隅、薩摩の十一か国 (読みは「ちゅうごく」)

◎下国―和泉、伊賀、志摩、伊豆、飛騨、隠岐、淡路、壱岐、対馬の九か国

これらの諸国官僚には国の格による位階の差があつたようで概略は次のとおりとされている。

◎大国―国守は従五位上 国守の下に権守(かみ・位階は同じか一つ下)、其の下に正六位の介(すけ)か権介(ごんのすけ)、正七位の大掾・権大掾、従七位上の少掾・権少掾、従八位上下の大目と少目など。

◎上国―国守は従五位下 国守の下に権守、其の下に従六位上の介・権介、従七位上の掾か権掾、従八位下の目など。

◎中国―国守は正六位下、介の位階不明・正七位か?、掾は正八位、位階不明の目など。

◎下国―従六位の国守、従八位の掾など。この他に諸国勤務の実情を監察する為、都から「巡察使」などが派遣されたらしいが親王が国守の国は少し違つていたと思われる。つまり監察官も余計な詮索をして出世に響くのは困るから何か有つても知らない振りをする。その為に常陸国で育つた平将門が力を付けたのではないか?

平家の始祖とされる第五十代・桓武天皇は光仁天皇(天智天皇の孫)の第一皇子であるが、母親は高野新笠と言う大陸系帰化人なので、国際結婚が多い現代とは違つて、大日本帝国天皇となるについで反対意見が出るのは当然のことである。それを強引に押さえ即位を実現させたのが常陸国守として石岡に勤務したこともある藤原宇合(ふじわらのうまかい)の息子たちである。

思いがけず皇位を得た桓武天皇は、大恩人である藤原兄弟の娘たちを宮廷に迎え入れ第一皇后は藤原良繼の娘・乙牟漏(おとむろ)、第二皇后は藤原百川の娘・旅子とした。此の女性は琵琶湖に抜ける途中の街道に「旅の神・還来(もどろき)神社祭神」として現在も祀られている。

常陸・上総・上野の三か国を親王任国にしたのは、桓武天皇と旅子との間に生まれた淳和天皇で

ある。親王任国は他国と違い政府の管轄では無くなり朝廷から任命された役人が独自に支配するから地元で力をつけ易い。平氏は其処で育った。

天智・天武両系に分かれていた皇室は、桓武天皇から天智天皇系に一本化され桓武・平城（へいぜい）・嵯峨・淳和（じゅんな）・仁明（にみょう）と続くのだが、其の選に漏れた一人が桓武天皇の子・葛原（かざらはら）親王であり、皇位に着く望みが消えた子孫は筑波周辺に土着し石岡に就職して領地を増やし、やがて都に戻り平清盛に至って天下を取った。其の潜伏期間は謙虚に地味に暮らす必要があったから、其の伝統で石岡の景気が悪いのか？と余計な事を考えた。

干支の話

菅原茂美

あけましておめでとうございます。この1年間、みんな張り切って、新年を迎えられた事を大変嬉しく思います。

今年は私の干支「亥（い）猪」ですが、お陰様で、84歳となります。

先ず干支（かんし）の始まりは中国で、「殷」の時代（紀元前1400年前頃）、「王充（おういっ）という人が考え出したものと言われている。干支は月日を表すカレンダーで、元々は木星の位置を示す為の漢字を一字あて天文学で使われてきた模様。木星は丁度12の位置を目印に、天空を一周するので、毎年の位置を示す、為に一つずつ漢字を割り当てられた」と言われる。当てる漢字は馴染み深い動物の名で、別に特別の意味はなく、後世の人が適当に意味を絡ませ、動物に優劣の関係はない。

◎子（ね）…鼠。子どもが多く子孫繁栄。

◎丑（うし）…牛。農耕・食料になるし、粘り強さや誠実さを持つ。

◎寅（とら）…虎。決断力と才知。

◎卯（う）…兎。穏やかで家内安全。

◎辰（たつ）…竜。伝説の生き物。古来中国では権力の象徴。

◎巳（み）…蛇。執念深い他、脱皮を繰り返すので、「死」と「再生」のシンボル。

◎午（うま）…馬と全く同じ。

◎未（ひつじ）…羊。群れで生活するので、家族安泰。

◎申（さる）…猿。山の賢者・神の使い。

◎酉（とり）…鶏。鳥は取り込むに通じ、商売繁盛

◎戌（いぬ）…犬。社会性が強く、忠実・献身的・安全。

◎亥（い）…猪。肉は万病を防ぎ、無病息災。

*

干支の動物の順番は、元々木星の位置なので、決まっている。しかしそれでは面白くないので、後の世の人が、色々考案して、面白おかしく作り替えたものらしい。

大昔神様は、動物たちにお触れを出して、『元日の朝あいさつに参れ！一番早く見えた者にその歳、動物の大将にしてやる！』とおっしゃられた。ところが猫はいつ行くのか忘れてしまい元日の朝あいさつに生き損ねた。理由は鼠に聞いたなら一日違いの二日を教えてもらった。そんなわけで猫は、永遠にはじかれてしまったという。ネズミの執念深い恨み。なお、行列については先頭とドンジリに大ハプニングがあったとか。先頭のネズミは牛の背中に乗ってやってきたが、門前でひよいと飛び降り、真つ先に神様に挨拶をしたのでその年は

大将になれた。しかし、ドンジリの猪は真つ先にかけつけたが、猪突猛進で神様の前を通り過ぎたので、慌てて逆戻りをしたら最下位になってしまったという。また、干支信奉国は多数あるが、ベトナムでは兎の代わりに猫が入っている。愛猫家はベトナムにお住まいになれば肩身の狭い思いをせずに済みますぞ！

癌との闘い

菅原茂美

新年早々、めでたくもない話で恐縮です。しかし、私の重要な趣味の一つが、ドクターストップ。風の会投稿と囲碁や日曜大工は良いが、今年で6年目となり、最も心惹かれる「家庭菜園」は、免疫力が低下しているので畑は厳禁との事。いくらマスクと手袋をしても畑は、細菌やカビの芽胞が無尽蔵。抗がん剤のため、免疫細胞は極端に減少。直ぐにも敗血症は見え見えだ。無菌室に何度も入院した本人を、射撃場のど真ん中に立たすわけにはいかぬ…とか。しかし畑は私の命。これこそ、生き甲斐だというのに…。

2016年（81歳）、私にとって3種類目の癌が発生した。悪性リンパ腫という血液の癌である。64歳での前立腺癌、79歳での、すい臓癌に次ぐもの。何が因果か知らないが、どうして3種類も…。18年、今度は悪性リンパ腫の再発と来ては4回目の癌という事になる。父母・兄妹は、いずれも癌で亡くなったが、7人きょうだいの4人は全くその心配がない。元々殆どの癌は遺伝病ではない。がんになり易い体質は、遺伝するらしい。

*

がん発生のメカニズム。人体は60兆個の細胞からなる。全ての正常細胞は90〜120日で自然老化死する。それが抜け毛、垢、目やに・大小便など。人体は、4か月後には、体を構成していた元素は、全て入れ替わる。しかし『あらお変わりもなく…』とか父と30違う息子が、お父さんにそっくりだね…とは唯物論に凝っている私には不思議でならない。ヒットラーの体を構成していたカルシウム元素が、今、我々の体の骨の一部かも知れない。

さて、古い正常細胞が新しい細胞に入れ替わる時に、毎日2000個ほどの細胞はコピーミスが起きる。そのミス細胞が、がん細胞に移行。しかし、免疫系統が正常なら、癌細胞は異物と見なされ、免疫細胞によって潰される。しかし敵もさるもの。抵抗して死なないものもあり、20年も生き延び、増殖すれば、それが「がん発生」ということになる。代謝活動で造られる「活性酸素(フリーラジカル)」は、体に不要な物を酸化などで処理する作用があり、正常細胞にも作用し、遺伝子のDNAを傷つける。するとコピーミスがあっても生き残る細胞があり、がんの基となる。活性酸素の「活性」とは、より不安定性が強く、より強い酸化作用を持つという意味である。

フリーラジカルは、紫外線・ストレス・喫煙・飲酒・睡眠不足などで、余分に造られ、正常細胞を傷つける。動物にがんが殆どないのは、タバコも吸わないし、酒も飲まない。それに寿命20歳を超える種は少ないからだ。

殆どの人は40歳ぐらいから、せっせとがんの芽が育ち、60歳を超える頃、急にがんの発生は増えてくる。動物は寿命の原理により、生死のバランスがほどよく、ポピュレーション(人口)が適切に

守られているが、人は科学の進歩などにより、長生きするため、人口維持の基準が破られている。

今回咽喉頭に激痛が走り、扁桃腺炎を疑い、

耳鼻科で、昨年3月と6月、適切な治療により激痛はおさまったが、9月再び激痛を繰り返す。医師は「がん性疼痛」とみたか、直ちに大きな病院の検査を手配。筑波大学病院で、病理検査・ペットCTなど精密検査の結果、咽喉頭癌は否定され、悪性リンパ腫の再発という事になった。10日間の無菌室入院の後は、自宅で抗がん剤(新薬)服用。まだ1か月を経経てないので(18年11月現在)何とも言えないが、経過は今のところ、ほぼ良好。私の場合、T細胞型悪性リンパ腫という事で、日本で非常に稀な事例という。筑波大初事例で、京都大学が主な経験者。京都大学と連携し、珍しい治療実験を開始。新薬(抗がん剤)はソフトで副作用が少ないという事で、私が初実用例となり、現在、厳重監視の基、新規治療を進行中。便秘・痛み・吐き気・むくみ、歩行不安定・しびれなどあるが、それらの対応薬と、免疫細胞激減によるウイルス・カビ・細菌対策としての併用薬多数。薬代は物凄く高価。

何しろ新薬実験と来ては、多少の心配はあるが、医学進歩のためなら、多少のリスクは覚悟の上で了承した。砂漠の中で1円玉を探すような希少事例。平均寿命は過ぎたし、歳に不足はない。社会に役立てば幸甚。

*

16年の悪性リンパ腫の抗がん剤点滴投与では、なんと白血球数が正常値の40分の1の100まで下がった。片目喪失。歩行不安定。頭部放射線照射で認知症加速の心配あり。熱も41℃。強烈な頭痛・便秘・むくみ・麻痺など主治医も憂慮。直ちに無菌

室入院。ありふれた細菌でも「敗血症」になり掛かけていたからである。家族ともマスクして離れて会話。

本来なら我が人生もこれで第一巻の終わり。ところが娘(消化器内科専門医の友人や先輩後輩に教授や医博は多数いるが、これだけ重複した危機を乗り越えられたのは「正に奇跡」と言っているらしい。それに、私には生活習慣病が殆どないからであらうと評しているという。私はタバコなど一度も吸った事はないが、30年程前、雀荘で副流煙はかなり吸った筈。

私は22年前、国際協力事業で熱帯滞在中、日本人プロジェクト12人の内、マラリアに感染していないのは私一人だけ。それは、熱帯でも半袖・半ズボンに厳禁。何の症状がなくなるとも、予防薬としてキニーネ剤を毎日飲み続けるなど、JICAの予防基準を、私一人だけが確実に守っていたからである。

*

さて今後の問題。多くの病を経験したが、更にもう少し生きたいと思うのは、孫達の成長をこの目で確かめたい。外孫の一人は既に医師になったが、内孫の長女は、現在自治医大の4年生。あと2年で茨城県内の僻地など、どこでも9年間、勤務する事になっている。孫には、きつい期待であったろうが、爺の日頃からの夢&信念であった。

末孫娘は、幼児の頃から私が膝に抱き、ワイルドライフなど、テレビの自然観察リポートを何度も見せてきた。私が定期購読の科学雑誌も、よく読んでいた。その所為か、アフリカで、国連の野生動物保護の仕事をしたと言いつい出、ある国立大学に高3(17年)の夏、入学案内書要請と同時に手紙を書いた。大学は『すぐ出てこい。話を聞こ

う」と言われ、懸命に希望を述べたら、11月には、入学試験もセンター試験もなしに、入学許可の内諾を貰った。「本気度」を認めてくれたらしい。さてこの孫娘が今後どんな道を歩む事か、是非確かめたい。世界も目が覚め、環境汚染を反省し、特別保護なしでも、野生動物が生き抜く事が私の夢。私が今日、がん連発という大きなリスクを背負いながら、やや元気でいられるのも、家族や近隣知人のサポートのほか、近所の方には車の運転をしていただき、無事通院ができています。心から感謝。そして趣味こそ生き甲斐・「風の会」への投稿は最大の生き甲斐。

83歳にもなつてまだ俺には「伸びしろ」がある：と考えるのは、笑いのかも知れないが未熟であればあるほど、その幅は大きい筈。チョコちゃんに叱られないよう、とにかく挑戦するつもり。がんなどに負けてたまるか！

そんな訳で命ある限り、ああでもない、こうでもないと吼えまくって、命を燃やし続けたい。今後とも、よろしくお願いいたします。

【特別企画】

打田升三の平家物語

巻九（二・二）

老馬（ろうば）のこと

有名な一の谷、鴨越え難所の場面を物語る章段に「老馬」が出てくるのは不自然かとも思ったのだが、是は平家物語らしい表現のしかたで、難所は老馬の知恵（こゝろ）で越える教訓を述べているらし

い。馬を馬鹿には出来ない。

平家のトップである宗盛卿は、三草山敗戦の報告を受け側近の安芸右馬助能行なる人物を使者として平家一門に「九郎義経が三草山の平家陣を攻め落として直ぐ近くまで押し寄せて来ている。特に山の側が（海岸部よりも）危険なので各々自分の兵を率いて防衛に向かい給え！」と緊急命令を出した。ところが上流階級の暮らしが身に付いている平家一門の連中は此の期に及んで危機感が全く無く誰も前線の護りに就こうとしない。鴨越えは誰も越えられないと過信していたのである。

困った宗盛は能登守教経に「毎度のことで済まないが貴方が向かってくれないか？」と頼んだ。教経は「合戦は自分だけの大事と思わなくては勝てません。狩りや漁のように足場の良い所だけを選んで出向き、条件の悪い所は避けるなどと言うことでは出来ないのです。幾度でも手強い相手の時には此の教経が引受けます。其の方面の敵は打ち破りますからご安心ください！」と頼もしげに言い切った。宗盛は喜んで、平家累代の家臣である越中前司盛俊を長とした一万余騎の軍勢を教経に託した。教経は兄の越前三位道盛を伴って山の手の守備に就いた。其処は鴨越の麓になる。

越前三位道盛は教経と違って公家氣質が抜け切らないから、出陣前に教経の仮屋形に北の方を呼んで別れを惜しんでいた。是を見た教経は怒って「此の守備範囲は強敵が来ると予想される為に私が向けられたのであり、誠に恐ろしい場所です。今でも、此の上の山には源氏の軍勢が来ており、それが一度に攻め降りて来たならば武器を取る間も無いでしょう。弓を持っても矢を継がなければ武器にならず、矢を継いでも射無ければ敵を倒せないのです。その様な時に北の方と別れを惜しで

いる暇は有りません！」と強く諫めた。道盛も尤もであると思い、急いで奥方を返し武装をした。

平家のほうは家庭の事情で緊迫感に欠けるところもあるが、攻め寄せる源氏は敵を追い詰めた心算で徐々に迫って来る。原本には「五日の暮れ方に源氏、岷陽野を發つて、やうやう生田の森に攻めちかづく」とある。翌日には土肥実平に率いられた主力の源氏勢が一谷の西門に向い、義経は有名な鴨越に向かつていて七日の早朝には一勢攻撃が始まるのである。

平家側から雀の松原（魚崎海岸、御影の森（東灘、岷陽野の方面を見渡せば源氏軍が思い思いの場所に陣を布いて威嚇のための篝火を焚いている。それを夜が更けるに任せて眺めていると山の端に月が出るようである。感心しても居られないので平家陣営でも「敵に見えるように焚き火をしろ！」と言うことで生田の森で形式的に焚き火をした。両軍の焚き火合戦を見ていると丁度、明けゆく空に星が出てるように見える。非常時でも優雅な平家は、伊勢物語第八十七段にある「澤辺の蜩」のことを思い出していた。

平家に比べて武骨な源氏は蜩もゴキブリも思い浮かべず「此処に陣を置いて馬に餌を与えよ！」などと合戦のことしか考えていない。平家方でも「源氏軍が何時、攻め寄せて来るのか？」不安があり、片時も安心しては居られないのである。

寿永三年（元暦元年・一一八四）二月六日の明け方に、九郎御曹司こと源義経は一万余騎の軍勢を二手に分けて、先ず土肥二郎実平に七千余騎を付けて一の谷の西側に向けた。自分は三千騎を率いて一の谷の後方から鴨越を駆け降りようと丹波路から搦手（裏口）に回った。従って来た兵たちは現場付近の地形を見て「是は有名な難所であるう：敵と戦

つて死ぬのなら兎も角、崖から落ちて死にたくは無い。この辺の地理に詳しい者は居ないのであるうか！」などと言いつつ合つた。

すると従つていた武士の中から武蔵国の住人・平山武者所季重が進み出て「私が、山の様子を知つて居ります」と言つた。義経が「貴方は東国育ちなのに、今日、初めて見る西国の山の案内が出来ると言うのは信じ難い」と否定すると、季重は「殿のお言葉とも思われませぬ：花の名所として吉野・泊瀬（よしの・はつせ）が歌人に知られているように、敵が籠る城の情報を剛勇の武士が知つていても不思議は無いでしょう！」と傍若無人に言い放つた。

続いて武蔵国の住人（成田一族別府小太郎と言う元服間も無い少年武士十八歳が進み出て「父の義重法師から教えて貰つた言葉ですが、敵に襲われた場合でも狩りをする場合でも、深い山中に迷つたときには、老いた馬に手綱を短くして追い立てて行けば必ず道に出る」と言われるそうです：」と申し述べた。義経は「良くぞ申した。雪は野原を埋めども老いたる馬ぞ道を知る」と言う言葉もあつた：」と言つて、白い毛に濃い色の刺毛がある老馬に前後が金属で光る鞍を置き、光るように磨いた轡（くわ）を嵌め、長めの手綱を結び付けて先頭を行かせた。

源氏の軍勢が初めてなら馬も初めて通る山道であるから知らない場所なのだが、文句も言えない馬は適当に山中を歩き続けた。季節は旧暦二月のこと高山の大雪も消えて山中の花も少し咲きかけ谷の鶯も義務的に鳴き始めて霞に迷い、山には白雲が掛かつて輝きを増し、木々には僅かに雪が残り断崖絶壁の道を隠すようにしている。

時おりに吹き渡る風は雪を運んで来て、それが

梅花かと疑われる光景であるが戦時行軍中であるから風情を楽しむ余裕は無い。馬に鞭を当てて山道を急がせた。その途中で日没となつたので、その場に陣を布いたけれども、場所が分からない。すると有名な武蔵坊弁慶が何処からか一人の老人を連れて来た。総大将の義経が「其の者は誰か？」と聞くと此の山の獵師だと言う。「それならば地理に詳しいであろう。詳しく説明せよ」と偉そうに言つた。獵師も負けずに「知らないでどうする」とばかり何でも聞け！という顔をしている。

義経は先ず「此処から平家が陣を構える一谷に攻め込もうと思うのだが、どうであろうか？」と質問をした。獵師は呆れたように「それは不可能でしょう：谷の深さは約九〇メートルで、途中には四十五メートル程の岩が突き出ていますから、とても人間は降りられず、騎馬などでは考えも及びません。さらに降りた先の平家陣中には落とし穴が掘られていて、穴の底には鋭利な刃物などが植えられています」と答えた。

それでも諦めきれない義経は「その様な場所では鹿も通らないのか？」と聞くと、漁師は専門知識を披露するように「鹿は通ります。暖かい季節になれば草の深い場所を求めて播磨の鹿は丹波に行き、寒くなれば雪の少ない所で餌を求める為に戻つて来るのです。其の時には近道で一谷の崖を抜けるようです」と説明した。

是を聞いた義経は「そう言うことならば馬場同然ではないか（馬と鹿では棲むところが違ふのだが：）鹿の通える場所を馬が抜けられない筈は無い！お前が案内をして此処を通過させよ：」と命じた。源平盛衰記では馬と鹿の違いは尾と、爪が割れているか丸いかの違いだけであろう：と無茶を言っている。鹿の爪が割れているから山道を行けるのである。

る。こうして馬鹿げた命令が下つた。

漁師が「此の身は老いてお供できません」と答えると義経は「つこく子が居ないのかと聞いて、其の子を案内者に召し出した。実は此の獵師は桓武平氏の末裔で平貞盛の曾孫・貞衡の子孫とされる鷲尾莊司武久と言つた。平家全盛だった時代にそう言う人物が獵師となつて山中に暮らしていたのは不自然であるけれども：本人はその様に主張したらしい。平家でも系統が違つて不遇であつたのか：義経は武久の子を鷲尾三郎義久と名乗らせ、武士として難所の案内をさせた。やがて平家が滅び源頼朝の時代になつてから義経が失脚し、奥州に逃れて文治五年（一一八九）四月、藤原泰衡の裏切りに遭い衣川で討死する。鷲尾三郎は義経と死所を共にする勇者となる。

一二之懸（いちにのかけ）のこと

前の章段で一の谷の崖を物ともせず馬で攻め下る決心がついたのであるから、さつさと攻撃を実行すれば良いのだが、此の章段は面倒な「裏口」から「表口」に切り替えた武士の話である。

源氏軍の熊谷次郎直実と息子の小次郎、それに平山季重は、二月六日の夜中まで搦手の攻撃隊に属していた。しかし急な崖を目前にして部隊が一時停止したときに熊谷次郎は息子を呼び「此処で崖を降りて攻撃するとなれば、先陣を目指しても（崖の降り具合で）誰が先になるか分からない。それよりは土肥が指揮する播磨路の隊に加わつて大手を攻めたほうが一の谷の先陣がとり易い：」と言つた。

小次郎も「：私もその様に思っていました」と

同調して、父子で搦手軍から勝手には大手軍に移ることにしたのである。

其の時に直実は思い出して「そう言えば、平山も裏手組に入っていたようであるが、彼も大勢と一緒に合戦は好まぬ男であるから、表を目指すに違いない。様子を見て参れ！」と家臣に平山の周辺を探らせた。予想したとおり、平山は熊谷よりも早く大手組に回るつもりで準備に移っており、「他人は知らず、此の季重は如何なる場合でも退却したり裏手に回ることなどはしない！」と独り言を言っていた。脱出の準備で馬に餌を与えたのだが事情を知らない馬はゆづくりと食べている。

「時間が無いのだから早く喰え！」と怒る家臣を季重が宥めて「此の馬とも今夜限りの別れになるかも知れない。怒るな」と言う。その様子を直実の家臣が聞いて主に報告した。

「やはり、そうであったか」と熊谷父子も家臣を連れて裏手組を抜け出し、大手攻めに回った。

熊谷次郎は黒に近い紺色の直垂に赤系統の鎧を着けて、背には赤い母衣(ほろ)矢を防ぐ袋を掛け「榎田栗毛」「ごんだくりげ」と言う有名な馬に乗っていた。小次郎は慈姑(くわい)科植物の澤瀉(おもたか)の汁で薄く染めた直垂に青系統の皮で織った鎧を着け「西楼」と名付けた毛並みの白い馬に騎乗していた。従う旗手は青黄色の直垂に青地に黄色で桜模様を描き出した鎧を着用してやはり黄色味を帯びた毛並みの馬を使っていた。

此の派手な主従の一行は、是から源義経らが駆け降りようとする谷を右に見ながら左方向に進んで行くと、普段は余り人も通らない田井の畑と言う古道を抜けて一の谷の海岸部に出た。付近の塩屋と言う場所には一の谷の西に布陣した土肥二郎実平指揮下の七千騎が居たのだが、夜中のことな

ので挨拶もせずには波打ち際を通り抜け、平家が構えた城らしき施設の西木戸口に押し掛けた。

非常時では有るが平家も真夜中の営業はしていない。大門は閉じられ陣中も静まり返っている。続く味方の兵も居ない。熊谷次郎は息子に「敵陣への一番乗りを狙う武士も多いであろうから先駆けは我らばかりと思つてはならない。誰の姿も見えないが、その辺に隠れていて夜明けと共に出て来るかもしれない。敵に名前だけでも知らせ置こう！」と平家方が備えた楯の近くに寄り「武蔵国の住人・熊谷次郎直実、その子・小二郎直家、一の谷の先陣なり！」と大声で名乗った。

城構えの中で警備に当たっていた平家軍の兵士は夜更けに敵も来ないであろうと、仮眠しかけた時に大声で起こされたから「少しうるさいけれども好きな様にさせておこう：馬を疲れさせ無駄な矢を射させることが出来る」と相手にしなかった。

当然、熊谷父子の名乗りなど聞いていない。

父子は城門から少し離れた場所ですべて平家の開店？を待つことにした。その中に源氏方から一騎の武者が来た。「誰ぞ」と問えば「季重」と答え「聞くのは誰か？」と言うので「直実」と言う。「熊谷殿はいつ頃から来られたのか？」と聞かれたので「宵の口から来ている」と正直に言えば「季重も同じように早く来ていれば良かった：途中で成田五郎に騙されて遅くなつてしまった：成田が“死ぬ時は一緒”などと調子の良い事を言うものだから、それならばと、連れ立って出てきた為に遅れてしまった！」と悔しそうに言う。成田五郎は埼玉の武士で藤原氏北家系の人物らしい。

熊谷直実は「平山殿も、先駆けをやり直せば良いではないか：先駆けをするには味方の軍勢が後方に居ないと確認して貰えない。それを証明する

者が居ないのに只一騎で敵に飛び込んでも何もならない：」と止めたので、平山も、そうか！と思いい小さな坂が在る場所に乗付け熊谷と共に源氏軍が来る方角に馬首を向けて待つことにした。

其処に成田がやつてきたので、熊谷と平山は合戦の打ち合わせでもするのかと思つていたのだが成田は二人を出し抜くようにして先に行つてしまった。それで「此の者(成田)は他人を騙すようにして先陣を狙っている：」と気づき、十五メートルほど遅れたのを、成田の馬は弱いと見越して負いかけ「見苦しくも、此の季重を騙したな！」と言いつながら追い抜いた。

こうして夜明けの気配が感じられる頃に熊谷と平山とは五騎で平家陣の大手に立った。熊谷父子は既に名乗りを上げているのだが、平山季重が聞いている前でもう一度、名乗って置こう：と大音声で「既に名乗つてはいるが武蔵国の住人・熊谷次郎直実、その子・小二郎直家、一の谷の先陣である。我と思う平家の侍どもは此の直実と勝負をせよ」と喚き立てた。

是を聞いた平家陣では「真夜中から外で騒ぎ立てていた熊谷父子を引っ捕えて来よう！」とばかり越中次郎兵衛盛嗣、上総五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清、後藤内定経を始め平家一門の名だたる武士が二十余騎ほど、大木戸を開き騎馬を揃えて現れた。

平山季重は鹿の子絞りの直垂に朱色の鎧を着け家紋と思われる横線二本が入った幌(ほろ)矢除けを背負い、糟毛と言う灰色・白色系の名馬に乗っており、従う旗手は黒系の鎧に兜を目深に被つて少し赤毛の馬に乗っていた。季重は「保元・平治両度の合戦に先駆けをしたる武蔵国の住人・平山武者所季重(むしやどろすえしげ)武者所は上皇・法皇など

の御所を護る武士……」と名乗り騎手と並んで敵に向かった。

熊谷父子と平山主従とは競うようにして平家勢に突っ込み、火の出るような勢いで攻めたので平家の武士たちも敵わずに城の中に退き、城外で戦うようにした。然しながら此の時に攻め寄せて来たのは熊谷と平山だけで、少し遅れて成田が来たけれども源氏の本隊は未だ到着していないのであるから平家陣営は何を言われても最初から大門を閉めて相手にしなければ良かったと思われる。

その中に馬が右の腹部を射られて倒れたので、熊谷直実は其の場に降り立った。小二郎も「……生年十六歳」と若さを強調して敵の防陣に接近し過ぎるほど攻め寄せて戦っていたが、右手を射られて馬から飛び降り父親の側に来た。それを見た直実が「負傷したか？」と聞く。「そうです……」と答える小二郎に「重傷を防ぐには鎧を揺すり上げて隙間を無くし射られないようにせよ。兜を傾けて顔面を防げ！」と教えた。源平盛衰記には鎌倉が出る際に「年齢制限で十七歳以上」となっていたので一歳水増しして申告したとなっている。

熊谷直実は、それから自分の鎧に立った敵の矢を抜き捨て、城内を睨んで「去年の冬に鎌倉を出てから此の命は兵衛佐殿（頼朝）に奉り、屍を一谷に晒そうと覚悟を決めた直実であるぞ。室山、水島（巻第八）二度の合戦に高名を挙げたと言う越中次郎兵衛は居ないか……上総五郎兵衛・悪七兵衛は居ないか、能登殿（能登守教経）はおいでにならないか……合戦で手柄を立てられるのは相手による！つまらぬ敵では戦っても無駄になるぞ。此の直実に組んで戦え！」と自信たっぷり勝負の押し売りを始めた。

是を聞いて平家方の越中次郎兵衛が折角、御指

名を受けたので顔を出すことにした。自分好みの濃い紫色の直垂に赤い鎧という派手な武装で灰白色の馬に乗り熊谷を目指して出て行った。しかし熊谷父子は他の敵に入られない様に並んで太刀を自分の頭部に当てて前へ前へと進んで来る。その形相が凄いので次郎兵衛は「是は……もては無い！」と恐ろしくなって引き返してしまった。

熊谷父子は「あれは越中次郎兵衛ではないか、我々の何処に敵として不足があるのか、我儘を言わずに此処へ来て組み打ちしろ！」と叫んだけれども、相手は「……そう言われても……」と遠慮して出て来ない。平家方の悪七兵衛が是を見て「見苦しいぞ」と言つて相手になろうとした。それを次郎兵衛が袖を抑え「御主君（能登守）の大事は是だけではない。止めておけ（熊谷のような奴を相手にするな）」と制した。

其の後（馬を失った熊谷は）予備の馬に乗り換えて暴れ回る。平山季重も熊谷父子が戦う間に少し馬を休憩させていて再び合戦を始めた。平家方は船で移動していたので馬が少ない。構えた櫓の上から矢を射るか、柵外に出て徒歩で戦うかし国防戦の方法が無い。敵（源氏）の騎馬武者は少なく、味方の歩兵が多いのでやたらと射撃をしても平家軍に当るだけである。平家の馬は酷使されて碌な餌を与えられていなかった。その上に平家は船上の生活が主であったから馬も環境に慣れず、多分、船酔いで疲れていた。それに比べて熊谷や平山ら源氏の武士が乗る馬は関東平野で野性充分に飼育されていた馬であるから体格も良く、馬同士で衝突しても相手が倒れるだけである。

その様な状態なので騎馬武者同士の一騎討ちなどは望めない（平家軍は防戦一方になる）平山季重は我が身に替えてもと、大事にしていた旗手の武士を

失ったので敵陣に突入して其の敵を討ち取った。熊谷父子も多くの敵を倒した。敵陣に先に来たのは熊谷父子であったが、未だ時間外で門が開いて無かったので中に入らず、平山は後から攻めたけれども敵が開けた木戸からの突入に成功したので此の戦場の一番乗りとされた。その為に熊谷と平山の間に「順番の争い」が生じた。

二度之懸（どのかけ）のこと

熊谷や平山らの中小武士団は、従う人数も少ないので何か目立った働きをしないと恩賞にあずかれないし功績も記録して貰えない。どうしても無理をして「目立つ戦い」を繰り広げるけれども、合戦の規模が拡大してくると「結集された戦力」が勝敗を決するようになる。一の谷の合戦でも熊谷、平山の後に信濃の村上基国が五十騎で攻めてそれに続く秩父、足利、三浦、武田から横山、児玉などの源氏勢が百騎、二百騎と攻撃を続けた。

その間に土肥次郎が率いる源氏主力の七千余騎が其々の旗を翻して攻撃に加わり後方の生田の森には五万余の源氏勢が布陣していた。その軍勢も第一線で戦いたいのだが戦場が狭いから「空き」を待っているしかない。待機している軍勢の中に武蔵国の河原太郎高直と河原次郎盛直という者がいた。兄弟らしいが伯父・甥とする資料もある。縁談では無いからどちらでも良いのだが、太郎が次郎を呼んで言った。

「大名は自分で何もしくなくても家来の手柄で功績を顕すことが出来るが、我らのような小企業の武士は自分で稼がないと功名が得られない。それなのに敵勢を前にして矢の一筋も射ることが出来

ず待機させられたのでは何にもならない。時間を無駄にしたく無いので私が平家陣に潜入して矢一筋でも放ってみようと思う。危険な行動であるから生還することは無理であろう。そなたは残って私の行動を証明して貰いたい！」

是を聞いた次郎は「悔しいことを言われる……只二人の間で一人だけ生き残ったならば、どれ程の栄華を保つても意味が無い。別々の場所ですたれるよりも一緒に行動し生死を共にしよう……」と、家臣を呼び集め自分たちの最後の有り様を、故郷の妻子に知らせる手筈を整えてから馬にも乗らず、二人で粗末な軽い草鞋に履き替え、弓を杖に、生田の森に陣取った平家軍の障害物を乗り越えて敵陣に入り込んだ。

折しも月は出ず、星明かりに鎧の色も定かで無いが河原太郎が大声を上げて「武蔵国の住人・河原太郎私高直、同次郎盛直（かわはらたろうさといちのたかなお、おなじく、じろうもりなお）、源氏の大手、生田の森の先陣ぞや……」と名乗った。

是を聞いた平家軍は、突然のことであり、余りにも大胆と言うか無謀な振る舞いに驚いて「……東国の武士ほど恐ろしい者はない……しかし、是だけ揃っている平家軍の陣営に、只二人だけで入り込んで何が出来ると言うのであろうか！然し折角来たのであるから適当に相手をしてやろう……」と親切に迎えてくれた。

河原兄弟は揃って弓の名手なので、それを良いことに手当たり次第に矢を放って平家の者を傷つけた。そうなると命に関わるから平家も遊んではいられない。西国で知られた射手を探した。備中国の住人（或いは讃岐国の住人か？）真名辺四郎と弟の真名辺五郎の名が挙げられたが、四郎は一の谷に居たので五郎が呼び出された。

暴れ回る敵を見た真名辺五郎は、自分の弓を引き絞って放した。是により河原太郎は鎧の胸部を背中まで射抜かれた。思わず弓にすがって動けなくなつたところへ河原次郎が走り寄り、怪我人を肩に柵を越えて脱出しようとした。それを真名辺が二の矢で狙い、次郎の腰の辺りを射たので兄弟は同じ場所で討死した。真名辺五郎の家臣が走り寄って河原兄弟を討ち取り、その首を平家の大将である平知盛に見せて状況を報告した。知盛は、「敵ながら」あつぱれな剛の者である。この様な人物を一騎当千の兵（つわもの）と言うのであろう。惜しい人物を死なせてしまつて残念である」と言われたのである。

河原兄弟の最後の模様は源氏の陣に残っていた者たちも見ていたので、一緒に行けなかった郎党たちが「河原殿ご兄弟は平家陣内に真つ先駆けて討死にされた……」と叫んで知らせた。それを聞いた梶原景時が「河原兄弟の討死は、所属する私市（きさい）党の皆さんの失態であるぞ。今は戦機も熟した。一気に攻めよ！」と激励した。是に合せて近くに居た武士団が関の声を上げ、続いて五万余騎の源氏勢が応じた。

梶原平三景時は足輕（徒歩で戦う下級の武士）に命じて、平家が構築した障害物を除かせてから五百余騎を率いて攻め込んだ。次男の平次景高が功を焦って先駆けしようとしたので、父親は使者を出して「後陣の軍勢が付いて来ないうちに先駆けをした者には褒美を与えない！」と大將軍（源範頼）が仰せである……」と言って制した。

景高は手綱を引いて少し馬を抑えてから「ものふ（武士）のとり伝えたる梓弓（あずさゆみ）梓は弓材の木ひいては人の返すものかは——放たれた矢は戻せない——返すことは出来ない！」と父上に伝えて下

さい」と言い捨て、敵陣に向かい喚声を上げて攻めこんだ。是に続いて父の平三、兄の源太・三郎と梶原の率いる五百余騎が合戦に加わり両軍の死闘が続いたけれども梶原勢は僅か五十騎程に減らされたので一旦は引くことにした。

所が引き揚げるメンバーの中に長男である源太景季（かげすゑ）の姿が見え無い。家臣に聞くと「敵陣に深入りをされたので討死されたようです……」と答える。平三景時は是を聞いて「此の世に生きていようと思うのは子供の為である。嫡男の源太を討たれては（自分が）無事でいても意味が無い！引き返せ」と合戦の場に戻り其処で改めてもう一度、大音声で名乗りをあげたのである。

「その昔、八幡殿（八幡太郎源義家）が後三年の合戦において出羽国仙北金沢の城を攻められた時、生年十六歳で真つ先駆けて戦い、右の目を射られながら射返した矢で敵を倒し後代に名を残した鎌倉権五郎景正の子孫、梶原平三景時である。」

一騎当千の兵（つわもの）と自負しているが、我と思わん者は此の景時を討って平家の大将に見せたらどうだ！」と喚きながら攻めかけた。

其処まで言われると平家陣でも放っては置けず新中納言知盛が「梶原は東国で有名な武将である。逃さずに討ち取れ」と命じた。

原本には触れて無いが、梶原氏は次のような家系と言われる。桓武平氏の祖とされる平国香の末弟・良茂から良正→致成→景成と続き、景成の子が鎌倉景正であつて、梶原景時は景正の曾孫になるのである。しかしながら先祖はどうでも、戦場では油断が出来ないので名乗りを挙げているうちに梶原景時は敵に囲まれてしまった。それでも自分のことより息子の源太を探す為に数万騎と言われた敵陣の中を駆け巡るしかない。

その頃、源太のほうは馬が戦死し、兜が脱げそうになりながら六、七メートルある崖を背にして敵兵に囲まれ二人の部下と共に奮戦中であつた。必死に戦っている所に景時が駆け付け「景時が来たぞ！源太よ、死ぬとも敵に後を見せるな！」と無理な激励をして共同で敵三人を討ち取り、二人に重傷を負わせた。それから「弓矢取る身は進むも退くも、其の状況次第であるぞ、さあ来い源太！」と励まして敵陣を脱出した。梶原景時は敵陣に一度ならず二度も入って息子を救出したので人々は是を「梶原の二度の駆け」と称した。

梶原一族などの活躍は源範頼を大将とする正面攻撃軍の話であるが、次の章段は源義経が指揮する搦手（裏手）の話になる。表に比べて裏が目立たないのは仕方が無いが、現地は海を背にした断崖絶壁らしいから苦勞も多く、是を攻める大将の名前が九郎（苦勞）義経でも洒落にならない。

また新しい一年が始まるが、人間の方は一年古くなるわけである。継続は力とばかりに十四年を走ってきたが、継続を力とするためには新陳代謝していかなければならないのだが、それがなかなか難しい。今年こそは若い力をと願っているのだが、果たしてどんな年になるのだろうか。
来るも去るも拒まぬふるさと風の会です。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

明けましてお目出とうございます。 本年もよろしくお願いいたします。

ふるさと風の会会員募集

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集製本し、石岡市まちかど情報センター他で販売しております。お問い合わせは編集事務局へ。



ふるさと風の文庫の主な作品

- ・打田 昇三…打田昇三全集（全6巻）、
歴史の嘘、私本平家物語、
私本将門記他
- ・兼平智恵子…歴史のさといしおか散歩、
ふるさと風のことば他
- ・伊東 弓子…風の景他
- ・小林 幸枝…風に舞う他
- ・菅原 茂美…遙かなる旅路（1、2）
- ・木村 進 …地域に埋もれた歴史シリーズ
（全24巻）
石岡地方のふるさと昔話、
茨城のちょっと面白い昔話他
- ・白井 啓治…皇帝ペンギンの首飾り、
霞ヶ浦の紅い鯨、
朗読/ふるさと物語…他